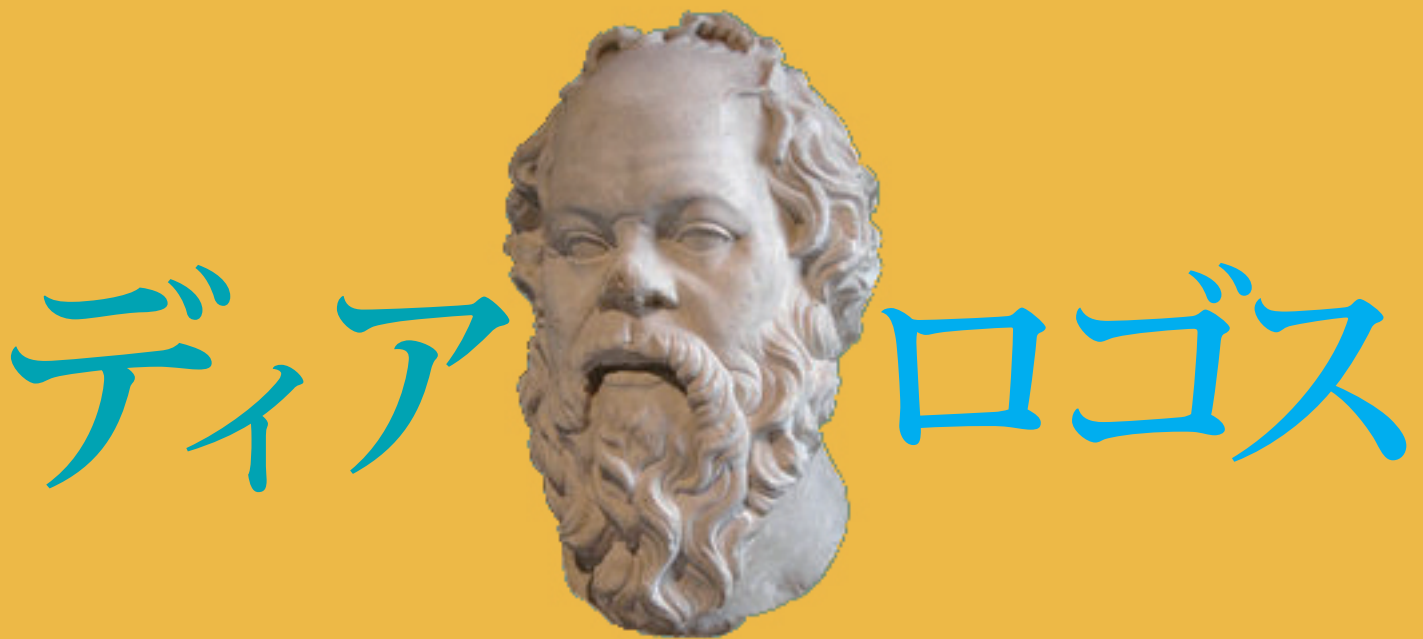


特集

学部の考える教養教育  
—基本的な考え方と具体的な課題—



ギリシャ語のΔΙΑΛΟΓΟΣは「対話」という意味です。英語・フランス語・ドイツ語・イタリア語など、西洋近代諸語も、それを音写して取り入れています。「対話」は「真理への道」として、古代ギリシャの哲学者ソクラテスの哲学の方法とされ、その弟子プラトンの著作の形式「対話編」となって有名となった言葉です。現代はその「真理への道」としての対話ばかりか、一般用法としての「相互理解の道」としての対話まで弱くなり、もっとも強く復活が望まれるものと言えます。

第12号

## 目次

はじめに	1
学長挨拶	3
平成19年度第1回岐阜大学教養教育推進センターFD研究会実施要項	4
第1回FD研究会プログラム	5
第1日目【9月27日(木)】	
【基調討論】	
第1部「学部を考える教養教育ー基本的な考え方と具体的な体制の問題ー」	
1. 教養教育推進センター・センター長 中村 征夫	7
2. 教育学部 副学部長(教育担当) 岩田 恵司	9
3. 地域科学部 教授 近藤 真	10
4. 医学部 副研究科長 岡野 幸雄	12
5. 工学部 副学部長(教務担当) 竹内 豊英	18
6. 応用生物科学部 副学部長(教学・研究担当) 小見山 章	23
第2部「授業分野の現状と問題点」	
1. 人文科学部会 山田 敏弘	25
2. 社会科学部会主任 近藤 真	27
3. 自然科学部会主任 若井 和憲	29
4. スポーツ・健康科学部会主任 川岸與志男	31
5. 総合科目部会主任 松本 康夫	37
6. 既修外国語部会主任 伊藤徳一郎	40
7. 未修外国語部会主任 松尾 幸忠	42
8. 留学生教育部会主任 森田 晃一	44
第2日目【9月28日(金)】	
【個別テーマ討論】	
「リメディアル教育のあり方ー学部教育とリメディアルー」	
・提題者 自然科学部会主任 若井 和憲	47
・講師 大垣工業高等学校 神谷 政人 教諭	49
岐阜農林高等学校 野原 清嗣 教諭	51
平成19年度第1回教養教育推進センターFD研究会アンケート集計結果	53
あとがき	61

## はじめに

岐阜大学教養教育推進センター長 中村征夫



岐阜大学は10年前に教養部を廃止しまして、新しい学部を誕生させました。それ以降、いろいろ紆余曲折はありましたけれども、いわゆる全学出動体制の名のもとに全学共通教育を維持してまいりました。その評価は色々あろうかと思えますけれども、私自身としては随分頑張ってきたのではないかなと思っています。

そしてその中で、いわゆる旧教養部におられた先生方が大変大きな貢献をされたと私は思っています。旧教養部の先生方が為された役割は二つあるかと思えます。一つは授業そのものを担当する人として随分頑張って頂きました。それからもう一つ、全学共通教育のカリキュラムであるとか、どういう人にやってもらったら良いかというヘッドハンティング的な部分、いわゆるマネジメントも随分お世話になりました。旧教養部の先生方のそのようなご尽力がなければ、この10年間の岐阜大学における全学共通教育は成り立たなかったのではないかと思います。

しかしこれから10年先、2017年、2020年ごろには、この体制を維持することはできないのではないかと心配しています。それは全学共通教育を中心的に担ってきていただいた先生方がほとんどおられなくなるからです。大学は、大雑把なあまり科学的ではない数字ですが、構成員の大体4%ぐらいが毎年代わっていきます。定年退職でお辞めになったり、他大学に移って行かれたりしますので、大体4%ずつ毎年人が入れ代わっております。教養部が無くなってから10年経ちましたので、現時点では旧教養部におられた先生方の約40%は既に岐阜大学を去っておられます。その結果、語学を担当して頂いている先生であるとか、数学とか物理とかを担当して頂いている先生が不足して困っているという現象が起こっています。これから先さらに10年経てば、さらに約40%の人たちが入れ代わるので、旧教養部におられた先生方は殆ど岐阜大学にはおられなくなります。そこには新しい体制の下で、それぞれの学部でそれぞれの特殊な専門分野で研究とか教育をするのに相応しいと判定されて採用された先生方ばかりになります。

はたしてそのような人ばかりの集団で、高等学校を卒業して大学1年生になったばかりの人たちの教育がうまくいくのであろうか、あるいは全学共通教育のマネジメントが出来るのであろうか、私は大いに心配いたしております。高等学校の教科書なんて見たこともないし、まして指導要領が在ることも知らない人達で、大学1年生になったばかりの人の教育がうまく出来るのだろうか、あるいは受験生を選抜するための入学試験問題等がうまく作れるのだろうか、と考えるととても心配です。やはり岐阜大学の何処かに、教養教育と言いますか大学の初年次教育と言いますか、1年生とか2年生を主として教育するに相応しい人達を任用する制度を設ける必要があるのではないかと私は思っております。

もう一点、別のお話をさせていただきますと、全学共通教育の期間が学生が大学生活を送る全期間の中に占める比率は大変小さいことを強調しておきたいと思えます。

私が大学生だった頃は、在学4年間の半分、2年間は完全に教養部というところで生活いたしました。いわゆる教養部の教育は学生時代の50%を占めていました。しかし、現在の岐阜大学では4年間在学することを原則としている学部では、8セメスターのうち全学共通教育の下で教育を受けるのは1年生の前期・後期と2年生の前期まで3セメスターです。しかもその全期間ではなく、一週間のうち月曜日から水曜日の午前中だけですので、約半分の1.5セメスターということになります。8セメスターの内、18%しか全学共通教育の下では教育を受けていません。医学部にいたっては、12セメスターの中の1セメスター、8%しか全学共通教育の下に居りません。

したがって各学部の先生方が自分の学部学生に何かあることをしっかり教えたいと思われたときは、それは基本的には学部教育の問題として取り上げていただかないと解決いたしません。例えば、最近の学生の語学能力、特に英語能力の問題で、自分の学部に入學して来る学生達の能力が低いので何とか高めたいと真剣にお考えになったとしたら、英語教育は教養教育の問題、全学共通教育の問題だと投げ出されては、決して解決することはありません。やはりそれは学部教育の問題として、学部の教員達が関与しない限り、解決しない状況になっているのではないかと思います。

全学共通教育という教育システムの中に学生が居る期間の比率は大変小さい、多くても十何%というレベルであることを皆さんによく知っていただきたい、意識していただきたいと思っております。

開会の挨拶にはあまり相応しくない話だったかもしれませんが、今日・明日のテーマとも関係することでしたので、この二つのこととお話させていただいて、開会の挨拶に代えさせていただきます。

今日・明日どうぞよろしくお願ひいたします。



# 学長挨拶

岐阜大学学長 黒木登志夫



私が岐阜大学に来たのは、6年と少し前になりますが、教養教育とはその時からずっと議論になっておりました。その間、議論が濃縮され、実践に向かい進歩がありました。すなわち、教養科目の必要コマ数を大幅に増やしたこと、そして教養教育推進センターがともかく動くようになってきたことです。しかし、大事だとみんな思いながら、それがうまく動いてない。議論をし始めると意見を纏める事が出来ない傾向はまだ残っております。

教養教育はすごく大事です。入学後最初に学生達が大学に来たということを実感させ、将来の基礎となるものだからです。

実は、私は医学進学過程の最後の学生です。高校から2年間教養教育を受け、次に医学部を受験するという今、言われているメディカルスクール構想と同じ制度でした。2年間学んだ一般教養の試験を受けるということは実に大変なことで、英語・ドイツ語・物理・化学・生物・数学すべて大学レベルの試験問題、それから人文科学と社会科学から一つずつ選んで受けるという試験を受けました。本当にやろうとすれば、やはりその位の濃密なことをやらなければならないのかも知れません。

東大の大学院の入学試験では英語の外にもう一つドイツ語かフランス語を試験に課すということを行なっていました。専門の教員からは、未修外国語をやる必要は無く英語だけで十分だという議論があったのですが、それに対して未修外国語がどれくらい出来るかというのは教養教育をどれくらい一生懸命勉強したかというバロメーターになるので試験すべきという意見があったのを思い出しました。

教養教育というものは、はっきりとした到達目標というものは無いし、その人の底に、その根本に沈んでいくようなものである。それだけに重要だけれども、それだけに捕らえようが無いし、それだけに本来の教育があると思っております。

この2日間、活発な議論を期待しております。

# 平成 19 年度

## 第 1 回岐阜大学教養教育推進センター FD 研究会実施要項

1. テーマ：学部を考える教養教育－基本的な考え方と具体的な課題－
2. 目的：センターではFD研究会を毎年行い、2年前からは年に2回開催し、いろいろな角度から検討を行ってきた。しかし、各学部での教養教育の捉え方等さまざまでありながら、その違いすらお互いに認識している状況ではない。本学の教養教育の理念についても十分な理解を得られていないふしがみられる。

そこで、じっくり時間をかけた自由な討論の場をもち、情報を共有した上で、問題点を抽出するために、1泊2日の合宿形式のFDを企画した。

古くて新しいテーマである大学での教養教育とは何かを、いま一度時間をかけ討論し、岐阜大学の教養教育についてお互いの理解を深め、基本的な考え方を共有し、目指すべき方向を確認することを主眼とし、また、個別のテーマとして昨年度から取り組んでいるリメディアル教育について理解を深め、具体的な対応について検討をする。
3. 実施日：平成 19 年 9 月 27 日（木）・28 日（金） 1泊2日
4. 場 所：岐阜羽島簡易保険保養センター「かんぼの宿」  
(羽島市桑原午南 1041 TEL 058 - 398 - 2631)
5. 主 催：岐阜大学教養教育推進センター

# 第1回FD研究会プログラム

第1日目【9月27日（木）】

## 【基調討論】

第1部「学部の考える教養教育ー基本的な考え方と具体的な体制の問題ー」

5学部及びセンターから15分程度のプレゼンテーション

その後30分程度の質問・討論

1. 教養教育推進センター・センター長 中村 征夫
2. 教育学部 副学部長（教育担当） 岩田 恵司
3. 地域科学部 教授 近藤 真
4. 医学部 副研究科長 岡野 幸雄
5. 工学部 副学部長（教務担当） 竹内 豊英
6. 応用生物科学部 副学部長（教学・研究担当） 小見山 章

第2部「授業分野の現状と問題点」

センターの8部会から10分程度の提題の後30分程度の

質疑応答

1. 人文科学部会 山田 敏弘
2. 社会科学部会主任 近藤 真
3. 自然科学部会主任 若井 和憲
4. スポーツ・健康科学部会主任 川岸與志男
5. 総合科目部会主任 松本 康夫
6. 既修外国語部会主任 伊藤徳一郎
7. 未修外国語部会主任 松尾 幸忠
8. 留学生教育部会主任 森田 晃一

第2日目【9月28日（金）】

## 【個別テーマ討論】

「リメディアル教育のあり方ー学部教育とリメディアルー」

- ・提題者 自然科学部会主任 若井 和憲
- ・講師 大垣工業高等学校 神谷 政人 教諭  
岐阜農林高等学校 野原 清嗣 教諭



教養教育推進センター・中村征夫センター長



参加者（前列中央 黒木登志夫学長、佐々木嘉三副学長）



# 第1日目【9月27日(木)】

## 【基調討論】

### 第1部

#### 「学部を考える教養教育－基本的な考え方と具体的な体制の問題－」

#### 1. 教養教育推進センター

プレゼンター センター長 中村 征夫 教授

#### 1. 社会の高学歴化

図1. 昔の学歴構成概念図

中卒 (50%)	高卒 (40%)	大卒 (10%)
-------------	-------------	-------------

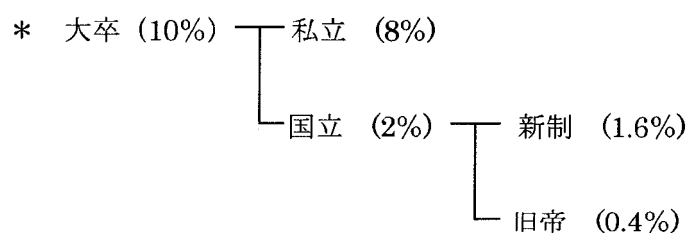
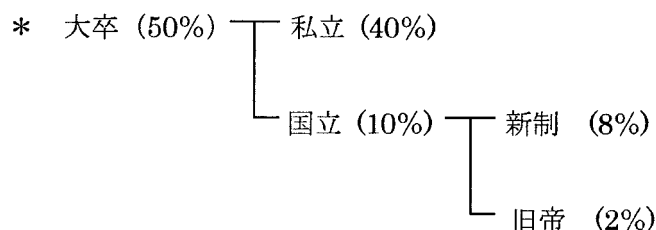


図2. 現在の学歴構成概念図

高卒 (50%)	大卒 (40%)	院卒 (10%)
-------------	-------------	-------------



1945年頃に生まれた日本人のおおよその学歴構成を図1に、40年後の1985年頃に生まれた日本人のそれを図2に示す。両図の比較から以下のことが判る。(1)現在の院卒(修士)、大卒、高卒は昔の大卒、高卒、中卒に相当する。(2)昔の国立大学生は、地方国立大学も含めて、同世代の最良の2%であった。現在は私立でも国立より評価が高い大学が増え、地方国立大学生は上位25%前後の学生である。最良の2%は旧帝大系の大学へ入学している。

## 2. 高学歴化がもたらしたもの

(1) 大学進学率が増大すれば、「大卒」と呼ばれる集団の平均的能力が低下するのは必然。(2) 大学生が5倍増え、大学教員も5倍増えた。現在の大学教員の数は昔の高校教員の数より多く、その集団の平均的能力も低下した。(3) 昔は国立大学（地方国立大学も含めて）は学生が全国から来る大学、現在の地方国立大学はご当地学生の大学。(4) 昔大卒に与えていた資格や免許を今も与えているとすれば、昔で言えば高卒に与えているようなもの。現在では大学院（修士）修了者に与えるような制度改革が必要。

## 3. 現代の「大学教育」に期待されること

(1) 一言に「大学」と言っても、個々の大学に入学してくる学生の資質は大学（学部）によって大きく異なる。入学者の実態に対応した教育。(2) 受験対策中心の高校教育の実態を直視し、理論的考察力・文章表現力の強化を重視。(3) 高度な知識や技術と共に人格の涵養。

## 4. 現代の「教養教育」とは

(1) 「教養教育」という言葉には歴史があり、昔の「エリートのための教養」というイメージが付きまとう。大衆化した大学の新生に与える教育には「初年次教育」、「一般教育」、「基礎教育」など新しい言葉を付与すべき。(2) 新生教育は、特定の領域に偏らない“普通科”的教育と高学年次の専門教育にそなえた基礎学力の養成。(3) 教養教育は「高度な教育を受けた者にはそれにふさわしい高度な教養」という視点から、大学院も含めた全在学期間を通して行う。

## 2. 教育学部

プレゼンター 副学部長（教育担当） 岩田 恵司 教授

### 教養教育に関する期待と課題

#### 1. 学部教育の課題

教育学部では小中高等学校、特別支援学校の教員養成を目指す学校教育教員養成課程と学校を取り巻く生涯教育に従事する人材育成を目指す生涯教育課程がある。

教育学部の教育は教員養成を目的とし、それ故教員免許法の定める免許科目の履修を前提に成り立っている。教員免許法の改正による教員免許状共通科目の単位増に伴い、特に小学校一種免及び中学校一種免取得を卒業要件とする学生にとっては教員免許法に定める（最低）単位数がほぼ卒業のための必修単位数となっている。

教員養成学部としてより質の高い教員養成を行うことは学部の責務であり、教科専門科目の必修単位数の増加が必要と考えるが、今以上の必修単位数を課すことが非常に困難である。

#### 2. 教養教育に関する課題と期待

教育学部では1年次より教育現場での実践体験を取り入れたカリキュラムを実施している。学生が社会と接触し、一層の規範意識、一般常識、倫理観がその時点から求められている。教育学部では学部の課す教養科目「教養セミナー」に位置づけ附属学校教員、義務教育の退職教員等とも協力して学生指導を行っている。今後これらの内容を更に充実することを検討している。

学部間の相違はあるにしても、このようなことは全学共通の課題として存在すると考えている。学部共通の内容については、共通教育としてこれを単位化し実施することについて、検討することを提案するものである。

一方、学生の基礎学力については、従来、各学部が必要とする内容を入学試験として課すことにより一定の水準が維持されてきた。しかし、高校卒業者の減少に伴っての受験者数の減少により、それが保証されているものではないという認識が必要ではないだろうか。入学学生の基礎学力の充実が学部教育の礎としての一面を持つ共通教育の重要な課題であると考え。語学教育、国語教育、理数教育の早期の効果的な実施が望まれる。大学入学初年時の教養教育は専門教育を可能とするための共通教育として位置づける必要があると考える。

又、いうまでもないが教養教育についての従来からの理念は、人格の育成にかかわる教員の養成を目的とする教育学部の教育においても大切にしているものであり、専門教育の充実の中にあっても十分可能であると考え。

### 3. 地域科学部

プレゼンター 近藤 真 教授

## 地域科学部からの報告

はじめに

### 1. 地域科学部の現状

### 2. 教養教育と地域科学部の問題点

### 3. 今後の地域科学部の課題

むすび

はじめに

地域科学部は教養教育にどのような位置づけと取り組みをしているのであろうか。これに応えるためには組織的な調査が必要であるが、今回は時間的に間に合わなかったので来年度に調査を実施するつもりなのでご容赦願いたい。ここでは報告者が分かる限りで報告したい。

### 1. 地域科学部の現状

①地域科学部教員数は50人おり、その内37人が2007年度では全学共通科目に出動し、出勤率は74%であった。ちなみに2006年度は39科目に34人が出動していたので今年度の出勤教員は若干名増えた。

②教養教育における地域科学部の開講コマ数は、2007年度では前後期計73コマである。

③地域科学部での学生に対する教養教育の位置づけであるが、卒業に必要な単位は、教養科目26単位、基礎科目26単位、専門教育科目82単位、合計134単位である。2005年度の地域科学部自己評価調査書によれば、学生たちの全学共通科目に対する満足度は85.3%、専門教育に対する満足度は82.5%、卒論ゼミの満足度は92.7%であったから、学生の満足度という指標からすれば教養教育が概ね成功していることは見てとれよう。2006年度もほとんど変わっていない。地域科学部では少人数教育を重視しており、地域科学部の提供する教養科目としての一年生前期の教養セミナーは一種の高校のクラス担任に似た助言教員による大学への導入ゼミであり、討論と研究発表やレポートの提出を通じて学生の姿勢について長年の大学合格のための受験技術的勉強からある問題やテーマを追究する大学の真理探究のための学問研究へと発想の転換を図り、論理的思考力をはぐくみ、教員や他の学生との学問的会話と人間的交流の中で、大学への定着を図るところに目的があるが、それは、地域科学部の一年生後期から二年生前期にかけての基礎セミナーに連動し、ひいては二年生後期から卒業までの専門セミナー（卒論ゼミ）につながっていく極めて重要な大学教育の入り口である。それゆえ、一セミナーが平均13人程度に収まるように9人の教員が100名の地域科学部一年生のために出動し、いろんな分野の教員が教養セミナーを担当している。地域科学部の2005年度の『外部評価報告書』では、全体として教養セミナーも学生の実質満足度（「期待通り」と「興味をもてた」の合計で、「どちらともいえない」は算入しない比率）は、60数パーセントと高いが、専門セミナーの満足度の80数パーセントという高さとは比べるとまだまだであるが、右も左も分からない1年生が最初に受ける半年間の教養セミナーと極めて少人数でじっくり腰をすえて2年半やりたい研究のできる専門セミナー（卒論ゼミ）とはやや違うのは止むを得ないであろうが、それでも教養セミナーの半年では受験時代のリハビリ期間としては短いので、通年にするべきであるようにも思うが、どうだろうか。いずれにせよ、教養セミナーの満足度をさらに高めることは地域科学部の教養教育の位置づけからして極めて重要な意味を持っている。

## 2. 教養教育と地域科学部の問題点

教養教育を重視して取り組んできた地域科学部の努力に言及してきたが、ここで、地域科学部における教養教育の位置づけとその問題点についてのべたい。地域科学部は、1996年に設立されて10年を経過した。その結果、当初半数近くにのぼった旧教養部からの移籍教員も少なくなり、かつてのような教養主義の雰囲気はもはや昔日の話である。しかし、地域科学部教員の教養教育に対する出勤率の高さからして、依然として全体的に教養教育への関心はかなり高いといえる。それは地域科学部の文系教員の多さから来る理科系大学である岐阜大学への責任感というものともいえよう。教育学部にも多数の文系教員がいるのであるが、やはり教職大学院や教員養成学部として卒業単位数の多さからくる多人数の教育学部生への講義の必修化と専門拘束性の高さから他学部への講義開放や教養教育への出勤の余裕はかならずしも大きいとはいえない。したがって、全学の教養教育に関して地域科学部への大学全体の期待が高まるのは当然である。地域科学部は、この期待に応える気はあるが、しかし、それが逆に地域科学部の内部に全学に振り回されるのではないかという警戒感を呼び起こす原因にもなる。教養教育は、全学の責任問題であり、一学部の問題ではない。それは、教養部を廃止するときに確認された原則である。かくして教養教育は、全学出勤体制で実施するという原則が確認されてきた。教養教育の重要性を深く自覚する地域科学部への教養教育の重責化への地域科学部教員のとりわけ旧教養部教員の少なからぬ警戒感の原因は、国の都合から、いわば、かつて教養部教員が、教養の理念に立って戦前の理系中心の大学が戦争を批判できない専門馬鹿を生み出した反省から偏った専門でなく幅広い教養教育の重要性を主張したのに、政府文部省は、教養部は高校の焼き直しで意味がないから廃止せよ、東大のような教養学部の新設も、私学の縄張りを侵す純粋文系学部の新設も、もはや国立には許されないが、第二工学部なら認められていると文部官僚に誘導されて教養部を廃止し、文理融合の地域科学部が設立されたのに、サリン事件がおきると、その舌の根も乾かぬうちに、教養教育が重要だと主張し、再び教養部のような教養教育の責任学部を作れといわんばかりの朝令暮改の大学政策を押し付けてきたことに関係大学教員は振り回され相当の被害を蒙り、大学人の知性と正義感を傷つけられたことに、根本的な淵源を発する。財政誘導という大学財政自治破壊的な方法で教養軽視の大学政策を許してきたことは、国も大学も我々大学人自身すらも反省して改めるべき重大問題であって、確かにそれは岐阜大学だけの問題ではないとしても、岐阜大学の教養教育をめぐる問題の認識の出発点におくべき決して忘れてはならない視点である。教養教育が重要であると考えたら全学で責任を負うのは当然である。そのうえでどのような管理運営を図る全学的な組織的システムを構築するのがベストなのかという議論は始まるのである。地域科学部がそのときに教養教育の重要性にかんがみ応分の役割を全力で果たす決意があることは言うまでもないことである。

## 3. 今後の地域科学部の課題

教養教育の改革は昨年度の2006年度に大きな改革がなされた。それは、①教養教育の必要単位数の増加。②総合科目の増加。③学部授業の「系」としての開放。④専門と教養の有機的結合のための逆楔形の教養科目の高年次履修の必修化。(3、4年次での2単位必修化した。)などである。しかし、今後、さらに地域科学部独自の位置づけとしてどのような体系的な教養教育が必要とされているのか、新たにアンケートをとって今後調査し、具体的なカリキュラムや教育内容のきめ細かい制度や指導方法の改善に取り組む必要がある。

### むすび

FD合宿では、医学部や工学部の教員アンケート調査に基づく教養教育問題に関する報告には学ぶところが多かった。次回は地域科学部においても実態調査を詳しく行って報告に臨みたい。

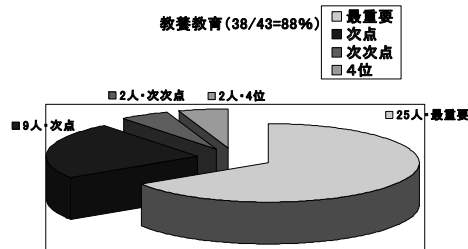
## 4. 医 学 部

プレゼンター 副研究科長 岡野幸雄 教授

### 教養教育に関する検討課題 —医学部におけるアンケートから—

教養教育推進センター企画運営委員会  
医学部委員・岡野幸雄

### Q1. 大学入学後1年ないし1年半の期間に重点を置くべき教育(その2)



### 対象: 医学科・看護学科の教授層

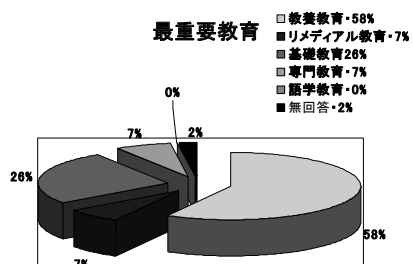
- 回答数: 43
- 所属: 医学科(31), 看護学科(9), 病院(1), センター(1), 無記入(1)
- 職位: 教授(36), 准教授(3), 講師(2), 無記入(2)
- 年齢: 60歳代(3), 50歳代(26), 40歳代(11), 無記入(3)

### Q1. 大学入学後1年ないし1年半の期間に重点を置くべき教育(その3)

#### 自由記載(その1)

- 早急に教養部を復活させ、それに専念させるべき。学生には最低1年間は専門教育をさせず、教養教育に専念させるべき。したがって各学部が担当する必要はない。
- 専門のための入門教育... 動機付け教育
- 各学生が最も興味を持っているのは入学した領域の学問である。したがって、その領域の専門教育を題材にして、リメディアル教育を行うのが最も望ましい。
- 専門教育での講義時間不足。生物を選択している受験生減少などを考慮すると、ある程度専門的な教育も必要となるかも。
- 医学部ではリメディアル教育は不要。到達目標を入学時に明示して、1年生の時に自主学習させればよい。
- 専門の内容を抜いっつ、教養を学ぶのが良い。

### Q1. 大学入学後1年ないし1年半の期間に重点を置くべき教育(その1)



### Q1. 大学入学後1年ないし1年半の期間に重点を置くべき教育(その4)

#### 自由記載(その2)

- 教養教育は本学の教育理念、医学部の教育理念からも非常に重要なものと考えられます。特に外国語教育の英語では少人数制の教育にするなど、更なる充実を望みます。さらに、外国でのボランティア経験などを認める異文化理解という科目もあってよいと考えます。
- 岐阜大学における現在の形の教養教育を廃止する① 英語教育などの専門教育に必要で社会的なニーズのある学力は学部が何らかの形で教育を配置して重点的な教育を行う。② 大学卒の資格を得るのに必要な単位数を満たすのが目的の講義は、放送大学などの利用可能なMedia型学習による取得で代替する。

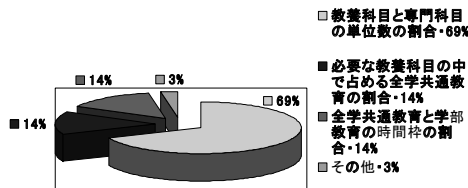
## Q2. 全学共通教育で開講してほしい教養科目名-1 (医学科系教員)

- ・ 文科系科目。地域社会学。文学・哲学。社会思想史・哲学・法学。古典文学。倫理学。文系科目。哲学 ……8
- ・ 英語教育。科学英語。英語プレゼンテーション。外国語科目。 ……4
- ・ 日本語に関する科目。如何に簡潔に書くか、医学生には必須。文章表現能力。ヒューマンコミュニケーション。行儀・礼儀作法(人とのつきあい方など)。 ……5
- ・ 自然科学系の基礎教科(特に非生物系の考える教科)。数学(2)。地球の歴史。 ……4
- ・ 臨床心理学。医の倫理。医の哲学。医学史。生命倫理。医療制度と日本人の健康。 ……5
- ・ 専門のための入門教育。生命科学における統計学。生物学。 ……3
- ・ これ以上は期待せず ……1

## Q3. 全学共通教育で履修すべき単位数を決定する根拠-2(看護学科教員)

決定根拠	自由記載
教養科目と専門科目の単位数の割合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看護学科は国家試験受験資格としての専門科目の単位数を取得する必要があり、過密なカリキュラムとなっている。従って、全学共通教育の必要単位数が多ければ、専門科目に影響する。現在もかなり困難な状況にある。</li> <li>・全学共通教育で履修すべき単位数を決定する根拠として、各学部での教育理念とともに岐阜大学としての望ましい教養教育の考え方も取り入れることが必要と考えられます。現在の学生の資質をみると、さらに教養教育の単位数を増加する必要があると思います。</li> </ul>

## Q3. 全学共通教育で履修すべき単位数を決定する根拠-1



## Q4. 学部で開講する教養科目について科目名とその理由及び到達目標-1

理由・目的	到達目標
入門教育は幅広い教材があるので、15回分の教材を開発し、公開できるような質の高いカリキュラムが必要。	専門分野の歴史から最先端までを学生が概説できる。
学部ごとに目指す教育目標に合致するものを選択する。	学部の到達目標に沿うもの。
英語教育は国際的な競争に勝つために必須。	論文を読めて、理解し、英作文ができ、討論できる。
生命科学が直面している最先端の知識から、倫理的諸問題を含めて、人類がこれからどのように立ち向かい、解決していくかを理解してもらう。	生命科学に対する理解が深まり、専門科目への橋渡しとなる。
我々が行う以上、現行のような型になるのではないか。	

## Q3. 全学共通教育で履修すべき単位数を決定する根拠-2(医学科教員)

決定根拠	自由記載
教養科目と専門科目の単位数の割合	・入学した学生の能力、到達すべき目標は、学部毎に異なります。これを、全学的な共通の物指しで統一することは、学生の意欲や興味を削ぐことにほかなりません。
必要な教養科目の中で占める全学共通教育の割合	・②に当たるとは思いますが、教養教育のために割り振られた時間の7~8割の時間に相当する単位数。
全学共通教育と学部教育の時間枠の割合	・学部によって履修すべき必要単位数はないと思う。また根拠もない。あえて選択するならば③だと思います。
その他	・教員側の要求度で単位数を決めるのではなく、学生が比較的自由にとれるように考慮された単位数であるべきだと思う。

## Q4. 学部で開講する教養科目について科目名とその理由及び到達目標-2

理由・目的	到達目標
各学部が得意とし、かつ、他学部の学生(つまりは全ての学生)が学ぶべき科目があれば。	
大学での勉学・研究に興味を持ってもらえるようなもの。他学部の人にも興味を持っていただけるもの。	ある程度の専門書を自ら読んでいくだけの力をつける。
<ul style="list-style-type: none"> <li>・医学倫理・社会学</li> <li>・地域医療学</li> <li>・メディカルコミュニケーション</li> </ul>	医療人として最低限のヒューマニティを修得する。岐阜地域医療の現状と課題を知る。
・医学英語	卒業後、常識を思われる語学能力が欠けている。
例えば、正しい文章を書く能力の増強を図ろうとしたとき、入学学部の科目を使った展開は学生の興味を引き付ける力が大きい。	学部の基礎科目を習得すると同時に、リメディアル教育を達成できる。

#### Q4. 学部で開講する教養科目について 科目名とその理由及び到達目標-6

理由・目的	到達目標
(倫理学：看護倫理学を考える基として、命に関わる倫理学を学ぶ) (食生活に関する科目：人間の心身にとって重要な食生活を科学的・文化的視点からとらえる)	(倫理学：生と死について思考する能力を高め、生命倫理学や医療倫理学に関する問題や課題を分析する能力が養われる)(食生活に関する科目：人間にとっての食生活の意味を理解することによって、健康の捉え方が深まる)
・ 医の倫理 ・ 関係法規 ・ 保健・福祉 ・ 医療の動向	学習の基礎・基本となるように、理解できる。
専門科目につなぐための科目	専門科目が抵抗なく理解できること。
現在は教養セミナーを開講しているが、入学後間近い1年生と身近に接することで、大学生活への適応をサポートできることは効果的と考えている。この他の科目については考えていない。	

#### Q4. 学部で開講する教養科目について 未修・既修あるいは能力別授業の必要性

- 能力別にすべきです。個人差が大きく、全員が同レベルの内容ではかえって非能率的です。
- 既修者が力量があるとは思えませんが、能力別は直ぐに実施すべきです。
- 能力別の授業は必要である。学力確認テストを行って、その結果をもとに、basic course, advanced courseに分けて教育を行う。
- 能力別にするまでの差があるのがよく分かりません。もし生物履修者とそうでない人の差が大きいなら必要だと思います。
- 能力別授業を行うことがよいが、それをやる体力(教員数と時間)がこちらにはない。
- ある程度は必要と思います。
- 広く教養として理解してもらえれば目標は達せられるので、能力別授業の必要性は特になくと思う。
- 何ゆえにそのような分別をするのか、理解に苦しむ。既修者はその科目を選ばないであろうし、選ばざるを得ないときは履修方式に参加して貰えば良い。

#### Q4. 学部で開講する教養科目について 科目名とその理由及び到達目標-7

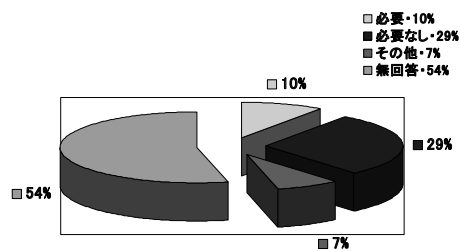
理由・目的	到達目標
学部が開講する教養科目という考え方は賛成できません。各学部がどのように開講するのかわかりませんが、全学部生を対象に開講するという考え方なら検討してもよい。	
現行の教養セミナー	
各学部の教員の専門に基づいて、その教員が対応可能な科目を自由に設定すればよい。それによって、学問のおもしろさが学生に伝わればよいし、また、学部の個性も顕れる。教養にも個性があつてよいと思う。	「教養」という概念の本質からいえば、教養科目に到達目標を定めるのは意味がないと思う。
専門科目の理解の為に開講する。	

#### Q5. 英語の能力別クラス編制について

賛成: 24/41=59%

- 賛成である。少なくとも2つに分けると教育効果が上がる。
- 効率的な授業のために導入しても良い。
- 英語は得て不得手が強く出る科目であり、能力別のクラス編成が望ましい。
- 学生には元々能力差があると思われるので、TOEICでも何でも良いので、能力別クラス編成をして授業を行うことは良いことだと思う。
- 何に重点をおくかによります。英語での意思疎通の力を養うことを目的とするなら能力別のクラスにしても良いと思います。
- TOEIC受験料を学部がもつなら公平でよい。能力別クラスは授業効果も上がりやすく良い。
- 英語の授業を能力別にすることは大賛成です。他大学の例を参考にしてください。ぜひ、検討してください。
- 教養としての外国語でなく、コミュニケーション技術としての外国語ということなら、よいと思う。

#### Q4. 学部で開講する教養科目について 未修・既修あるいは能力別授業の必要性



#### Q5. 英語の能力別クラス編制について

不要・否定的: 11/41=27%

- 英語教員数を増やさない限り不可能ではないか。
- 反対。互助精神の育成に多少なりとも逆行する。
- TOEIC等を受験させることには賛成だが、能力別クラス編成には反対。
- 必要であればすばい。個人的には必要と感じていませんが。
- 到達目標がTOEIC ~点というのであれば能力別クラス編成は意味ある。しかし、教養教育の既修外国語の到達目標がTOEIC ~点というのは悲しい気がする。
- 必要がないし、無駄である。専門科目を少しでも英語で表現できる能力が必要。
- 学生の選択肢を増やすという意味では賛成ですが、全員に強制するのは反対です。TOEIC等では学べない、大学における英語の授業内容や付随する学びがあると考えているからです。

無回答(不明): 6/41=15%



#### Q5. TOEICなどによる英語単位認定について

賛成・条件付き賛成:25/41=61%

- ・ 賛成。努力すれば自由時間が増加するのは良い。
- ・ 十分な英語によるdiscussionができればよいと考えるならこの制度の意味はあると考えます。
- ・ 評価基準をきちんとして運用すれば問題ない。
- ・ 学生の選択肢を増やすという意味で賛成です。
- ・ 制度自身はいいと思いますが、容易に到達できるレベルでないことを期待します。
- ・ アドバンスコースを設定できると良いと思う。
- ・ かなりのhigh levelな点であれば賛成。

#### Q6. 専門教育の一環としての英語教育について

- ① その必要性、
- ② 期待している到達目標、
- ③ TOEIC等で一定の資格を得た者に対してその単位を修得したものとみなす制度の導入、
- ④ その他

#### Q5. TOEICなどによる英語単位認定について

否定的:10/41=24%

- ・ 全員に授業を受けさせたほうが良いと思います。
- ・ あまり良くないと思う。TOEIC高得点者には、より高度の教育を行うべきではないかと思う。
- ・ 大学で教える英語教育とTOEICの趣旨とは必ずしも重ならないのではないかと思います。
- ・ いいけれど、TOEICで高得点の者が専門科目を英語で表現できる能力があるとは思えない。
- ・ 一定の資格を得ているとはいえ、語学は日常的にやらなければすぐに衰えるものです。与える単位は半分くらいにして、残りの単位を修得すべく、きちんと教科を履修させる（免除はしない）。
- ・ 外国語単位は、TOEIC等の既習にかかわらず、大学として単位認定が必要である。
- ・ 大学教育の放棄に等しい。特徴ある内容で学生をひきつける必要あり。
- ・ TOEICなどの資格を認めることは賛成ですが、既修外国語の単位を6単位認めるかどうかの単位数の適切かどうかに関してはわかりません。

#### Q6. 専門教育の一環としての英語教育について

- ・ 1年だけでなく、6年間の中でトータルに考える必要がある。
- ・ 文献を読む習慣をつけるためにも必要。
- ・ 今後の医学教育には、英語教育が必須である。自由に意見を述べることができ、討論することができるようにするべきだと思う。
- ・ 必要性はある。到達目標は、英語論文が不自由せず読める程度。単位認定制度は良い。
- ・ 英語でカンファレンスあるいは発表ができるレベルが目標。
- ・ 現状でよい。
- ・ TOEIC等による単位認定は良いと思う。
- ・ 専門的知識を得て、発表するのに必要語学力は当然必要です。
- ・ 必要性あり。英語での学会発表、論文作成能力を修得する。単位認定制度は賛成。
- ・ 医師が、一定のレベルの英語力に達していないと、国際化の今日活躍の場が限定されてしまいます。
- ・ 大学卒者は英語の文章を読むことが出来、外人とコミュニケーションすることが出来ると、一般人は考えています。語学は毎日の積み重ねしか上達する方法がないのですから、TOEICがどうであれ、英語教育に参加してもらうことが望ましい。
- ・ 絶対に必要
- ・ 必要性は高いと思います。

#### Q5. 既習外国語科目に関する意見(自由記載)

- ・ 英語に関しては、それこそ専門教育枠内でも、わずかな時間をさいても各学年で実施すべきだと思う。専門課程でもできるような内容（論文の通読、oral presentation など）はあると思う。
- ・ 教官がころころ代わるオムニバス式の授業は百害あって一利無し。
- ・ 英語教育を担当する「英語を母国語とする教員」の数を増加して、さらに英語Bを充実してほしい。

#### Q6. 専門教育の一環としての英語教育について

- ・ 専門性を向上させるのであれば、また必要であるならば、当然教育することが重要であると思います。期待している到達目標が適切であるかどうかは判断が難しいと思います。
- ・ 専門教育の一環としての英語教育の必要性はないと思う。
- ・ 英語は必須のコミュニケーションツールなので必要。会話ができることを目指す。単位認定は積極的に進める。
- ・ 国際社会なので、自分の専門領域に関して、英語で表現する能力を獲得させる。TOEICで一定の資格を得て単位修得とみなすのも一法だが、ほんの一部でしかない。
- ・ 必要性はあると思います。TOEIC等で一定の資格を得た者に対して、単位認定の制度については、好ましいと思います。
- ・ 必要性は高い。論文通読、oral presentationなどは到達目標となり得る。一定の資格を得たからといって努力する必要がないとは言えない。さらにその上のレベルの勉強をやればよい。
- ・ これからは英語で自由に討論できることが必要です。少なくとも理系学科では意思疎通能力を重視すべきと考えます。

### Q6. 専門教育の一環としての英語教育について

- ①必要である。②論文の読解、作成、基本的な論理的な討論できる力③結構である。
- 地域医療に貢献する医師を養成するのが目的であれば、あえてそれほどこだわる必要はない。
- ③はよくない。
- 国際学会、国際会議で通用する英語プレゼンテーション能力を高めるため、外部（民間）から積極的に講師を雇用する。大学教員である必要はない。大学教員は、学生の能力のチェックのみに集中する。
- ①学部学生にはその必要性をあまり感じない。②英文テキストを読める、ある程度外国人とコミュニケーションできるとよい。③technical termが問題となるので、それらをチェックする必要がある。
- ①と②については、英語論文を読む力、専門に関する質疑応答が英語でできる能力を高める必要性を感じています。
- ①海外文献の抄読のため必要である。海外での医療活動にとり必要である ②会話ができる。文献が読める ③導入は賛成ではありません。
- 英語での学会発表、討論を自由に操ることができるだけ英語力を期待する。学生時代からPubMedの検索などで医学の世界的広がりを実感することも必要。

### Q7. 大学院生に対する教養教育について

- 可能であれば実施は望ましいと思われるものの、医学系研究科での対応は、教員の対応が困難と予想される。
- Summer schoolのように少しレベルの高い教養教育を夏休み期間に開講すれば良い（受講者がいない場合はやらなくて良いが、いつも看板をかかげておくことは重要であろう）。
- 単位互換性（学部間、大学院間）。自主プログラム。
- 特別講演などで良いと思います。ただし、特別講演に参加しやすい環境作りには大学は配慮すべきです。
- 教養を対象とする様なセミナーの開催と参加を基本として、参加し易いテーマから時間から回数を考えれば良いのでは・・・自分から育むために。
- 医学系では生命倫理が必要なことも知れません。実際医学系研究科では、これのみが必修科目とされている。
- 院生に対する教養教育の指針があるとよいと思います。
- 学部学生に対する意見と同じです。
- 院生に対しては各個人の判断で教養を学べばよいと思う。
- 大学院生に対する教養教育では、社会人入学者が多い現在、英語教育の導入を望んでいます。もし、全学レベルで検討していただけるならばたいへんよいと思います。大学院の入学資格が強化されているので、資格認定で入学した大学院生には教養教育の履修を求める制度を作ることを強く望んでいる。

### Q6. 専門教育の一環としての英語教育について

- 専門英語については各学部で対応すればよいと思う。
- 専門教育の中の1科目として、英語教育の必要性はあります。専門分野の英語の文献を読み理解することがまず必要と考えます。あまり難しくない程度の英語の文献を理解できるくらいの能力をつけてほしい。TOEICの単位互換は不賛成です。
- ①英語教育は重要である②必要な文献探することができる③TOEIC等を利用することも検討する必要がある。
- 必要性はあるように思うが、その内容等は各学部で検討すればよいように思う。
- ③はよくない。

### Q7. 大学院生に対する教養教育について

- 大学院生に対する教養教育を実施する方向で検討していただきたい。

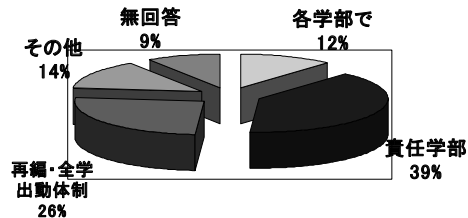
### Q7. 大学院生に対する教養教育について

- 大学院教育は専門教育であると考える。
- 博士号にふさわしい基礎的知識や思考力は確かに必要と思うが、一律の教養教育では得られにくいのではないか。
- 大学院生はやはり専門的に深く研究する必要があるため、教養教育は大学1年生十分時間をとって行えばよい。
- 英会話の先生がいる前で研究報告会を行っている。その表現、文法について適宜チェックを受けている。
- 現状では無理。2年で卒業する学生を主力に研究費獲得につながる研究を行い、そのうえ、教養教育は無理。いくつか書籍を指定して読ませるとか、年に6回講師を招いて特別講義を行うとかの方法は良いかもしれない。
- 大学院生の教養教育は、各学部が責任を持つことが望ましい。
- 当科では、分岐時に必要な英会話の習得に動んでいます。
- 統計学、コンピュータサイエンス（プログラミング）などがあれば良いと思います。
- 英語の活用をさらに進めること。
- 教養教育は、いつになっても必要。

### Q8. 今後10年程度先まで展望した上で、本学における教養教育の実施体制はどうあるべきだとお考えですか？

- ① 全学共通教育体制を廃止し、教養教育は各学部で実施する。
- ② 教養教育に責任をもつ学部を設ける。
- ③ 現在の5学部構成を再編し、人文・社会科学系学部を増やした上で、全学出動体制を維持する。
- ④ その他(ご自由にお考えを書いて下さい)

### Q8. 教養教育のあるべき姿



### Q8. 教養教育のあるべき姿

#### ③人文・社会系学部を増やす(10/42=24%)

- ・理想的には②だが、実現不可能と思われるので③。(ただし、医学部人員を減らすのは限界なので、減らさずできる場合。)
- ・これが現実的だと思います。

#### ④その他自由記載

- ・非常勤講師(客員教授)の充実。入試への対応も考慮する必要がある。
- ・特別講師を招いて講義を行う。
- ・ある程度の専任教員を増えた責任学部を設置し、それに加えて各学部から併任という形で出向して授業編成を行えば良い(責任学部構想と全学出動態勢の融合)。
- ・文部科学省からの縛りがあるなら、まずそれを打破せねばなりません。

### Q8. 教養教育のあるべき姿

#### ①各学部で実施

- ・前述したように、学生の能力並びに興味の範囲は、学部毎に大きく異なる。したがって、教養教育は各学部で行い、全学体制は廃止すべきである。その際、人的資源確保の観点から、旧教養部教官数を各学部均等に再配備すべきである。全学的な組織としては、教育の方略(学生の評価方法、講義法、他)を教官に教えるプロの小集団が必要。
- ・外部講師を積極的に取り入れる。人選については、各学部で責任を持つ。
- ・①の方向が学部での対応が一番スムーズだと思います。

### Q8. 教養教育のあるべき姿

#### ④その他自由記載

- ・正直、どのような方法がよしいかについてはよくわからない。しかし、①の方法では、教養教育は成立しないことは理解できる。②は適切な学部が中心となって実施していただくことができれば目的を達成することはできるかも知れない。しかし、輪番制ということになり、医学部も担当しなければならぬならば教養の目的をクリアできないと思われる。教育学部など、内部に見合った学部が担当してくだされば教育効果として大きい結果が得られると思われる。③は、現体制を5学部・・・ということであれば、各学部の教員数が減少することであり、専門教育が弱体化するおそれがある。
- ・これ以上科目と単位を増やす必要なし。岐阜大学は現行で行くしかない。負担増は専門科目がだめになってよいのか。あえて、地域科学部と岐阜市立短大を合併させるならば②ができる。
- ・早急に教養部を復活させ、それに専念させるべき。学生には最低1年間は専門教育をさせず、教養教育に専念させるべき。したがって各学部が担当する必要はない。

### Q8. 教養教育のあるべき姿

#### ②教養教育に責任をもつ学部を設ける(17/43=40%)

- ・教養教育を専任する教官が必要です。
- ・本学には文系を本格的にアピール出来る学部がないので、これを設けることは必要。
- ・実施が可能かどうかは不明ですが、基本は賛成です。②が困難であれば、③がよいと思います。内容はともかく再編は必要か。そして、全学出動態勢を維持する。
- ・教養部の復活が理想的であるが、現状では無理なので①。医学系の基礎教養科目の単位を1年生で取得できなかったものに対して、専門教育を受けさせることは断固反対! ③は絶対に反対!
- ・「②+学部からの開講」のスタイルが必要ではないでしょうか? ①は厳しいものがありますし、③では無責任と云うか。全体的なバランスが取れた試み全てが問題ではないでしょうか。
- ・教養教育に責任をもつ学部を設ける。基礎的な学問を行う理学部や文学部がない本学では、教養教育を担当できる教員は多くないと思います。結局、以前の教養部のように責任をもって教育を担当して下さる教員が必要だと思います。
- ・教養教育に責任をもつ学部を設ける。ただ、責任学部の負担は大きくなるので、学部の再編成は必要と思う。たとえば、責任学部から教養教育負担に相当する教員を移動させるなど。

### Q8. 教養教育のあるべき姿

岐阜大学における現在の形の教養教育を廃止する

- 理由: 私自身教養教育の重要性を理解しているつもりですし、また、学生としての自分を振り返ってみても教養教育が役立っていることは身にしみ感じています。しかしながら、東大の教養学部のような教養教育に特化した機関を形成することができず、また、全学部の教員が教養教育に関心を失っているような状況では、教養教育と称して何らかの授業を行っても得るものはほとんどありません。学生もかわいそうです。現在教養教育を行っていく唯一の根拠は、そうしなければ大学と認めてもらえないからに過ぎないからではないでしょうか。そうだとすれば、全学体制の教養教育などは廃止して、
- ① 英語教育などの専門教育に必要な単位数を満たすのが目的の講義は、放送大学などの利用可能なMedia 型学習による取得で代用する。というのがよいように思います。
  - ② 大学卒の資格を得るのに必要な単位数を満たすのが目的の講義は、放送大学などの利用可能なMedia 型学習による取得で代用する。というのがよいように思います。

## 5. 工 学 部

プレゼンター 副学部長（教務担当） 竹内 豊英 教授



### 教養科目修得単位

科目・系	最低修得単位			
個別科目	人文科学系	4	教養教育 推進セン ター開講 科目	
	社会化学系	4		
	自然科学系	2		
	スポーツ・健康科学系	2		
総合科目※	6			
外国語科目	既修外国語系	4		工学部開 講科目
	未修外国語系	2		
	既修・未修外国語系	2		
自由選択科目	2			
セミナー	フレッシューズセミナー	2		工学部開 講科目
教養基礎	現代テクノロジーの展開Ⅰ	2		
	現代テクノロジーの展開Ⅱ	2		
合計		34	2	

### 工学基礎科目 数学・物理学・化学・生物学・地学

学科	工学基礎科目 単位
社会基盤工学科	15
機械システム工学科	15
応用化学科	17
電気電子工学科	17
生命工学科	15
応用情報学科	20
機能材料工学科	17
人間情報システム工学科	15
数理デザイン工学科	15

卒研着手・卒業に必要な単位

卒業に必要な総単位：132単位  
(18年度以降の入学者)

3

### 1年次開講コマ数

学科	18年前学期		18年後学期		19年前学期		19年後学期	
	木曜日	金曜日	木曜日	金曜日	木曜日	金曜日	木曜日	金曜日
社会	3	2	3	3	3	2	3	3
機械	4	4	4	4	4	4	4	4
応化	3	3	2	3	3	3	2	3
電気	1	4	3	3	1	4	3	4
生命	2	4	4	4	3	3	4	4
情報	4	5	4	3	4	5	4	3
機能	2	2	5	4	2	2	4	4
人間	2	2	3	4	3	1	3	4
数理	3	3	4	4	3	3	4	4

キャップ制：各学期34単位(1年次)

4

### 導入教育・転換教育

フレッシューズセミナー

現代テクノロジーの展開Ⅰ・Ⅱ

→ Q4で回答を紹介

5

Q1：大学入学後1年ないし1年半の期間になすべき教育は何に重点を置くべきだとお考えですか。(例えば、①教養教育、②リメディアル教育、③基礎教育、④専門教育など)

10	全く私的な意見ですが、いわゆる深い教養、および広い徹底的な部分も含めた範囲が広い者が多く、なつたというの最近の傾向ではないでしょうか？大学は深い教養と広い知識をつけるチャンスです。①は重要ですが、②は高校の補習のようなものですか？③との差がわかりません。
10	①教養教育 自分自身の経験から、大学の1年半で教養教育をしっかり受けたことにより、それ以降の学習に対する気構えがでたような気がします。
10	教養教育
10	教養教育を中心にすべき。専門学校との差別化を考え、広い教養を身に付けさせないと大学の価値がない。また、②③は必要に応じて行うべきだが、④専門教育は導入に留めるべき。その上で、学生には十分に広い選択権を提示し、CAP制やCPAの枠を外し、多くの履修を認め、かつ奨励すべきと考える。教養は広い事自身に意味があると考えるので。
12	教養教育とリメディアル教育。幅広い知見といえるような考え方を身に付けた学生を社会に送り出すという意味で、教養教育は非常に重要であると思う。よって、教養教育に重点を置いて欲しい。理系科目について言えば、科学的な論理性のある考え方を身に付けると考えたら、高校で理系、物理、化学をしっかり理解するだけでかなりの部分が満足される気がする。よって、リメディアル教育のようなものに重点を置くのも良いと思う。
13	①教養教育①：専門基礎教育①で重点を置いた教育
13	②リメディアル教育は、あまりにも心なしすぎる。せいで①教養教育が、③基礎教育とすべきもの。ただしその際、①教養教育や③基礎教育が、なぜ不可欠であるのかを、ちゃんと学生に説得力をもって説明すべきである。
13	①教養と基礎
13	①教養教育 及び ③基礎教育
13	入学後1年のときだけ大事というものはない。教養も、基礎も、4年間ずっと大事で、常に教養や基礎に戻りつつ教育すべき。ただ、制度上、学年が進んでから教養をじっくり教えるのは不可能そうなので、教養に力を入れたい。
13	①教養教育と工学基礎教育

教養教育 ≥ 基礎教育

6



Q2-2: 全学共通教育で開講する教養科目について何を期待していますか？  
希望する開講科目

2	社会人の常識となるような法律学、経済学
2	環境教育
2	2次分野(言語と実務)
2	各教員でも、分野が細分化されているので、それにあった科目。例えば、生物学の場合であれば、細胞生物学とか免疫学といったような科目。
2	教養としての物理学
2	(1)楽読英語(英語文法や文学作品を読むのではない)たとえば、新聞、広告、包装紙の注意書き、マニュアルなどを読んで理解できること。(2)テクニカルライティング: マニュアルなどを作成するにあたっての文章表現、論理的な構成ができるようにする。どうしても人文社教科目が必要ならば、現在の方法とは違うような方法も考える。たとえば、2組に分かれて教員員としてある問題についてデベートした結果を聞いて、自分の判断を論理的に下すことができること。逆に、全く関係無く役に立たない(？)科目もありません。たとえば、古代エジプト語を勉強してステラ(墓碑名)が読めるようになるような講義、邦語入門、介助の実験を学ぶなど。
2	教養: 工学に関連する。法律や歴史、政治組織
2	工学基礎: 数学、物理、化学
2	2つの分野にも必要となる共通の、一般的な科目の教育科目。自分たちでは教育できない、人文社会系の教育科目。
2	教養として当然あるべき、人文、社会、自然系の科目。ただし、無関係な科目は少数であるべき。現状は、教養の割合が優先されているのには無いかとの疑念を持たざるを得ない。それに加え、日本での就職、卒業能力を養うことも中心とした。専門科目のよき科目が必要。卒業論文の指導で、主語述語の対応や段落毎の意味、文章の論理的構成を教えるなければならない現状は、専門教育に差し障りがない。是非必要。また、社会でのマナーや、社会の仕組みも10代のうちから学べるように、職業教育が必要に思われる。学生に対して、しふんは卒業後に消費者だけでなく(生産者にもなる)などという事を理解させないといけない。
2	技術史・科学史、技術論・科学論といった工学を取り巻く歴史的財源についての知見、発明発見のいきさつ(大塚英孝、科学者の魂(倉田もも子))

(1=精神論、2=分野ノ科目に言及) 13

Q4-1: フレッシュヤーズセミナーなどのようなポリシーの下に開講していますか？

社会	・社会基盤工学の教養的、入門的内容に関連するいくつかのテーマについて、少数人のクラス(1クラス13人程度×6クラス)により学習を進める。 ・各クラスを3~4名の教員が担当し、教員と学生、および学生間の交流と対話を重視しながら、社会基盤工学に関連する様々なトピックスを取り上げ、学生の専門分野に対する認識の向上を図る。 ・授業形式は講義、実験、実習等多様な形態とし、専門科目を学ぶための専門的知識を習得させることとし、その面白さを実感させる。 ・建設事業の第一線で活躍中の専門家(民間企業と行政から各1名)による合同講演会を2回実施し、人々の暮らしを支える社会基盤工学の一端を示して産業界に対する理解を深める。
組織	このポリシーでは、CAE教育システムを基盤として、CAEの基礎技術を学生にとっての目的としており、1年次後学期以降のCAE関連、CAD関連の授業及び、研究の際に必要なコンピュータ利用技術の基礎を修得する。
応化	新入生が高校までの環境と大きく異なる事から、大学生活に問題なくクラディングできるようにサポートをしてあげる。学生生活4年間の大きなイメージがつかめるよう研究室の4年生や大学院生と接触し、ビジョンが聞けるようにしてあげる。
応情	1) 3年後期の研究配属まで、各教員の研究紹介や内容を教える機会が少ないため、勉強のモチベーションを高める目的で研究紹介 2) 計算機の入門講義を行う。 3) 担任制を取っていないので、教員と1年生との接する機会

14

Q4-1: フレッシュヤーズセミナーなどのようなポリシーの下に開講していますか？

機能	具体的な内容としては、情報処理センターの利用方法やそこで使えるソフトの使い方の説明、図書館の利用方法の説明と、研究室訪問などを行い、最終的に研究室訪問に興味を持った内容についてプレゼンテーションしてもらっています。 目的は、学生に大学の施設を利用できるようになってもらうこと、学部の教員と触れ合ってもらうこと、さらに「見える」「聞ける」教育を行うことができるようになってもらうことです。最後の目的のためにプレゼンテーションしてもらっています。プレゼンの準備のために、情報処理センターや図書館を学生が実際に使い、今後それらの施設を積極的に利用するきっかけになればと思っています。
人間	1. 研究室の研究内容や雰囲気を知り、卒業研究へ向けた目的意識を高める。一研究室見学 2. 受講に必要なスキルを身につける。→コンピュータリテラシー教育 3. 安全な学生生活に向けて注意喚起を行う。一研究室教育 4. 3年生までの指導担当教員と接点を通じる。一研究室せき
数理	初年次の転換教育として、正解のない課題(グループワーク、プレゼン)に真剣に取り組ませる中で、自らの視野、考える力、英語および日本語でのコミュニケーション力、構想力などについてそれらの必要性を具体的に気づかせ、それらの獲得へのモチベーションを高める。また、導入教育として情報・計算リテラシーを教える。

15

Q4-2: 現代テクノロジーの展開はどのようなポリシーの下に開講していますか？

社会	①現代テクノロジーの展開 I について ・社会基盤工学と従来の土木工学との関係に触れ、それらの概要、歴史、現状及び将来の方向性について講義することにより、学生が社会基盤工学に対する知識を深め、現代社会におけるその役割を理解することを目指す。それと併せて、そのあり方等を考えるための情報収集も行う。 ・講義は4名の専門分野の異なる教員が担当し、社会基盤に関する工学や技術の全般、現代社会を取り巻く諸問題、社会基盤施設の計画・設計・施工・土木行政、並びに今後の課題や将来展望について解説する。
組織	②現代テクノロジーの展開 II について ・「社会基盤工学」に関する知識・技術を実際の施設やシステムなどの整備・管理に活かす上で、コンピュータによる様々なソフトウェアに関する技術を取得することを狙う。 ・例題に対してフローチャートを作成させ、論理の流れを組み立てることにより、プログラミングに最も重要な論理的思考力を使う。 ・できるだけ多くの演習を取り上げ、Visual BasicとFortran90/95の基本的文法を習得させる。
人間	シラバスに記入の通り 現代社会は、「マイクロエレクトロニクス」を中心とした「高度工業社会」あるいは「情報社会」への変遷の真っ只中にある。一方で、21世紀は環境の時代とも言われ、機械工学に求められる技術革新は、20世紀の資源とエネルギーを大量投入した効率優先生産という流れからも大きく変遷し、社会に貢献するものでなくてはならない。 本講義では、こうした現状を踏まえ、機械工学の各分野に関する歴史と現状および将来動向についての概要を講義し、機械工学と人間との関わりに関する認識を深めるとともに、学生諸君がどのような機械技術者になるかを真剣に考え、そのための目標とする。 この講義を通して、「機械工学」という専門分野の全容についての的確なイメージと親しみを持ってもらうことも開講の目的の一つである。

16

Q4-2: 現代テクノロジーの展開はどのようなポリシーの下に開講していますか？

応化	専門における研究と関連した内容の、過去の研究の紹介(特に実験に関連したもの)や現在の問題の提議(例: 東、そのような分野の研究者を自覚してほしいと内容を決定している)
応情	各教員が3コマ程度を使い、応用情報分野における最先端の研究紹介を行う
機能	具体的な内容としては、学部の全教員が、一人1週間のオムニバス形式で自分の研究の内容やトピックスについて講義していきます。 目的としては、学部所属の教員がどのような研究をしているのかを知ってもらい、興味を持ってもらうことと、また、学生の「材料」に対するイメージと、実際に行われている研究内容のギャップを埋めてもらうことも目的のひとつです。
人間	人間関係システム工学では、現代テクノロジーの展開において、学部内の各専門分野の最新技術を理解するとともに、卒業への目的意識をもたせ、受講計画、さらには、卒業後の研究開発について考える機会を与えることを目指している。そのため、学部の各教員が1コマずつ担当し、各自の専門分野の最新技術を講義するとともに研究内容について触れる。
数理	現代テクノロジーの展開 I(数式): 工学の森羅万象の現象を、微分方程式という目を通して記述するアプローチを講義する。数学・物理・工学(力学)に登場する微分方程式を具体的に提示して、それが持つ意味、解法結果(微分方程式の解)から、現象を洞察する数理的アプローチを紹介する。例: 有振動幅の振り子、運動方程式、共振現象、摩擦をともなう振動、動的安定性、非線形の離散運動方程式など。 注) 微分方程式の解法そのものを教える数学の講義ではない。By If (教務委員の注: 毎年「微分方程式」がテーマというわけではありません。今年のテーマは「アナログからデジタルへ」)

17

Q5-1: 全学共通教育の既修外国語科目(英語A1、英語A2、英語B)についてどのようなことを望みますか？

1	能力があり、教養があり、見聞がある英語が教えられること。
2	やはり、全学共通教育の外国語の教育は専門の先生が担当されたほうがよいと思います。自分の経験から、教養での英語を、専門分野の先生から教わったことはありませんでした。
3	工学部の学生に関しては、やはり、入学前から英語を持って授業にのぞむ学生が多いと思う。今まで以上に、各教員も英語の力をつけて授業に臨んでほしいと思う。
4	文法、単語、会話についての強制力のある訓練。教養的な文学読書や広く英語圏の文化を知ることなどより、リアルな学問的興味をもつような訓練。
5	簡単な言い回しから英文文法、どんな分野でも良いので、面白さや面白さを積極的に伝えて、聞かせていくこと。量こそ重要で、英語Bを各科目が担当する、としているので、教養の英語としてはなく、学部の英語として2年生でやるようにして月曜日から金曜日の適当な時間に行えるようにして欲しい。英語での自由な創作を行うように。
6	どのくらいの知識が要求されているか良く知りませんが、学生に課題を多く与えた際に指導が結局は学生のためになると思います。
7	現状では英語の講義を受けたことで学生の英語能力が向上することは望まないが、少なくとも英語を話すこと、聞くこと、読むことへの距離感を狭くすることを望む。これは、英語が必要になるときに英語に対して距離感を感じなければ向上するようになるからである。
8	2) 英語の論文を指導したり、英語で発表・応答をすることに対し、抵抗を感じない学生を育成すること。英語に興味を持つとか、または英語の重要性を認識するとかは多分に学生個々の事による。
9	2) 基礎英語を明確にして、JABEE審査に耐えられるものとしていただきたい。
10	2) リーディング、ホキョウリ
11	2) 文法に慣れず、リスニングに慣れず、読解を鍛える「読む英語」の科目
12	2) 大塚英孝などには無かった英英の英訳

(1=講義方法、2=科目の中身・目標、3=学外学習) 18

Q-5-1: 全学共通教育の既修外国語系科目(英語A1、英語A2、英語B)についてどのようなことを望みますか？

2	シラバスレベルなどの名前を英語で調べ、読み方指導
2	3科目で段階を分けて学生の総合的な英語力を高めること。英語Bは多様でユニークな英語の授業を開発し実践し、その評価をしてほしい。
2	会話よりも、読解と作文を教えて欲しい。また、教材は小難しいだけでなく、科学や技術のエッセー、また高校の理科の教科書など、英語としてそれと難しくはなく、科学的論理によりかかれたものを教えて欲しい。
2	それぞれの科目に、特徴づけがあればいいかと思う。例えば、英語A1は読解力をつけさせる、英語A2は文法を再確認させ、簡単な英文が書けるようになる。英語Bは物理、化学、生物学に関する基礎的な英文テキストを用いて行なう。学生に読解目的がわかりやすくしなうか。
1	①英語文法や文学作品を教えるだけの授業は卒業させる。外国旅行が一歩化しているので、外国の文化に触れるのは教育を通じてではなく自ら直接行なえばいい。②外国人の発音に慣れるので、アメリカ英語だけではなくインド人やフランス人の話す英語にも慣れる。きれいな発音に憧れたことはないが、ちゃんと発音練習ができるかどうかは重点を置く。③たとえば、洋楽の歌詞の意味は分かって聞いているのか？教習を認めてみるか？
2	①音読(日常)英会話ができること。
2	②英語はコミュニケーションの手段があるので、英会話を身に付けるのが良いのではないだろうか。書物や論文などの読解などについては、専門に高いレベルの英語で教養をすれば十分と思う。
2	③リーディングや音読で、ナレーションやテキストを音読して理解する方法を教えてほしい。日本語に対応した適切な英語表現を開発する方法を教えてほしい。
2	④英語論文を読める、できれば書ける能力をつけたい。
2	⑤英検によるコミュニケーション能力

(1=講義方法、2=科目の中身・目標、3=学外学習)

19

Q-5-1: 全学共通教育の既修外国語系科目(英語A1、英語A2、英語B)についてどのようなことを望みますか？

1	数学や物理、化学など高校～大学初年度程度の英語の教科書、あるいは電化製品、コンピュータのマニュアルが(調べれば)読めるように、あるいは読める気が起こる程度に教育して欲しい。英語を見るだけで拒絶反応・思考停止を起こす学生が多い。
2	4年生以降の研究活動を行う上で必要となる英語論文を読む、英文マニュアルを読んで理解するという能力が発達すると大変でないと奮起もあるようだが、発音が分からないと音読であっても読み進むのが難しくなる。実際に、ゼミで録音を見て英語の意味は理解できても、発音することができない学生が多いようです。ですので、録音の発音記号の意味を知り、単語を調べたときに発音もイメージできるような訓練をする機会が増えるように考えます。
2	多様な価値観を持つ技術者の養成といった視点からすると、英語はほどほどで片言言葉でも多くの言語を学ぶほうがコミュニケーション能力と民族の歴史や文化に対する見方に対する見方が変われると思うので少なくしてほしい。
2	TOEICなど、資格をとることに重点をおくことについては、あまりよくないと思います。それは専門学校や大学の英会話学校でできることで、大学でしか学べないことは何かを考へるべきだと思います。
3	同じやなら単位取得のためという感じのしない運用を望みます。
2	必修からはずす。代わりに、TOEICを選修条件とする。選択科目として、個性的な外国語系科目を開講する。
2	大学内での教育にとらわれる必要はない。現在は、外国語に関しては、大学外にいくのが良い。勉学の習慣はある。それを利用すればよい。大学は、結果を確保すればよい。

(1=講義方法、2=科目の中身・目標、3=学外学習)

20

Q-5-2: 他大学では入学時に全員にTOEIC等を受験させ、英語の授業については能力別クラス編成をしているところがありますがこのことについてどう思いますか？

1	問題ないと思う。なぜTOEICでなく、TOEFLでないのかはわからない。
1	それほそれで、教育方針として適切であると思います。
1	1. 普及
1	2. 積極的に推進すべきと思う
1	3. 英語教育は、能力別編成にするほうが、教員も学生も、やりやすく、効果も上がると思う。クラス分けに、かならずしもTOEICを受験させる必要はないと思うが...
1	基本的に、賛成です。ただし、工学部の学生の場合、あるレベルの学生の数に限りがあるのではないかと思います。
1	基本的に賛成だが、英語の授業はあまり受けていないと思うので、共通テストの点でも良いのではないかと。クラスを分けてやった方が、初歩の段階ではできれば成績をつけたい場合だけにすぎない、いきなり厳しくない。3時間だけではまったく足りない。古いカリキュラムのように8時間とならなければならぬ。また、やり方は上手な。TOEIC700点以上ならば、講義をどらなくても8時間の単位を修めると、単位取得は初歩の応用では単位取得を要する。
1	1. 英検などかかると考えます。
1	2. 授業の余裕があれば、同じようにして欲しい。
1	3. 普及
1	OK
1	能力別のクラス分けは良いと思うが、頑張った学生が上のクラスに上れるような仕組みを作らないと、下のクラスの学生に劣等感やうつけい感もたつてしまう。当然、サボれば下のクラスに落ちることも含めて、クラスごとに能力がそろった方が、レベルに合わせた教育ができるという点で賛成である。しかし、成績をどうつけるかは問題になるとは思う。

(1=賛成、2=反対、3=疑問、4=他)

21

Q-5-2: 他大学では入学時に全員にTOEIC等を受験させ、英語の授業については能力別クラス編成をしているところがありますがこのことについてどう思いますか？

1	1 やつても良いと思う
1	2 能力別にすべきだと思います。
1	3 個々の学生の英語力を向上させるためによいことだと思います。
2	8割ほどは英語力不足なのは分かっているため、TOEIC受験は必要だが、クラス分けに使う必要はない。
2	2 TOEICの受験は良いですが、点数においてクラス分け出ないのは、あまりよくないと思います。
2	3 英語教育以前に徹底的に教えることが重要である。英語に力点を置くにしても、英語を必要とするような職業に就くまでには必要である。
2	4 話す力をつけたいなら、能力別にしない方がよいかも知れないが、レベルが異なるクラスを機つて開講して、卒後に活用されたい。
2	英語は、生活や仕事をする上でのコミュニケーション手段だから必要、という意識を持たせることが大事で、嫌々やらせられる勉強の一つに限り下からない工夫の方が重要である。つまり、開始時の能力は問わない、結果的に面白く感じている目標に達すれば合格とする。
2	少し変ではないですか？入学試験の位置づけはなんですか？英会話の授業ですか？TOEICの受験準備の授業であればわかりませんが、すいません。質問の意図がわかりません。
2	入学早々、落ちこぼれ組を作ってしまうのは、避けたいと思う。入学後の努力で優秀な学生になる方が、高校までの苦学や得意は、一度リセットして、岐阜大学の授業に臨むことを学生には推奨したい。
2	実際に授業をスタートするのが遅くなり、授業の内容が薄くなると思う。能力的にクラス編成を要するということになると、受験させてみなければ授業計画が立たないことになる。少人数の教育体制でなければ無理だと思います。

(1=賛成、2=反対、3=疑問、4=他)

22

Q-5-2: 他大学では入学時に全員にTOEIC等を受験させ、英語の授業については能力別クラス編成をしているところがありますがこのことについてどう思いますか？

3	1 殊大でどう英語教育をするのかの方針によって、能力別に分けるのかどうかを議論すべきだと思います。
3	2 学習段階別クラス編成はいいが、TOEICで測れるか疑問
3	入学時に TOEIC を受験させる前に、個別入試に英語を受験科目に加えるかどうかを議論した方がいいかと思いますが。工学部では試験がない英語が苦手な学生が多く、能力別クラス編成が巧くできるか疑問です。
3	2 どちらでも良いと思う。これこそ教える側でよいのか？能力別クラス編成はむしろ数理科社会で必要では？(東洋経済世界とか、別に数学特論とか、教員が専門より高度でもいっしょに履修しないと思う)学生のTOEICの点数を見て、大学教育の目標とする方針があるならば能力別クラス編成を定めるべきであるが、そうでないなら、いっしょにTOEICの点数を測りかける必要性は無いと考へます。
3	TOEICを受験させて自発的に英語を勉強するように促すことが目的であると考え、講義との連携が取れないならばあまり意味がないと思う。具体的にはTOEICを受験させることと英語の講義の内容が異なるならば、最終的に学生のためであり、英語能力向上という目標を達成できると思えない。個人的には、TOEIC等を受験させるとともに、英語の講義をすべてTOEIC集講義にする方が学生の英語能力向上に繋がると考へる。一方、能力別にクラス編成をするということは、数学、力学でも同じことが言えるかな？英語だけなら可能なか疑問である。
4	1 指導する先生のTOEICの点数とTOEICの点数を比較して、

(1=賛成、2=反対、3=疑問、4=他)

23

Q-5-3: 本学ではTOEIC等で一定の資格を得た者に対して既修外国語の単位を6単位まで修得したものとみなす制度がありますが、この制度についてどう思いますか？

1	1 いいと思う。しかし、1-2割までに制限したほうが良い。
1	2 TOEICの受験資格に対するモチベーション向上のためにも、優れた制度であると思います。
1	3 良いと思う。
1	4 良い制度と思う。
1	5 活用してほしい。
1	6 TOEICの点数で、単位を認定することは賛成。
1	7 良い制度だと思います。
1	8 良いと思う。
1	9 1. ちゃんとOK
1	2 TOEICに限らず、空手や剣道にシヤンマイや柔道のほうが良いと思う。
1	3 英検、大学入学で授業のレベルはTOEICの点数はついていないものが圧倒的に多い。従って、留学生や帰国子女に対する既修外国語受領資格と認めてほしい。
1	4 能力さえあれば、その科目を履修する必要はないと思うので、それで良いと思う。英語の場合それを専門にする学生は少ないように見受けられるので、能力があるから特別高度な教育を行うという必要はないと思うが、単位認定なら別で良いと思う。
1	5 工学部系の学生の場合、理数系科目については、能力があればより高度な教育を行うという必要はあると思う。
1	6 授業と同様以上の語学学習時間を確保したと判断できれば、現行制度で賛成です。
1	7 良い制度だと思います。英検英語を学ぶことができ、卒業後英検合格と取立、また卒業後の教育であるから、なお、TOEIC以外の選択科目に与える。学生各自が目的意識をもって学習できるのであれば良いと思います。
1	8 特筆事項があるか？
1	9 理由も、あまり賛同できません。(上の)大学でしか学べないとは何かを考へるべきだと思います)を挙げている。
1	10 6単位まで、認めて良い制度とは思えない。
1	11 どちらかというと反対です。この制度を実施すると、単位さえあればよいという風潮を強化することになるのではないかと考へます。

(1=賛成、2=反対、3=提案・疑問)

24

**Q-5-3: 本学ではTOEIC等で一定の資格を得た者に対して既修外国語の単位を6単位まで修得したものとみなす制度がありますが、この制度についてどう思いますか。**

コストパフォーマンス面での問題ととらえるべき。自前で実質的に良い外国語教育を提供するだけの人材、時間、資金などがなければ、無理せずに関切ることが必要だが、「他がそうだから」「美だから」という要素は排せざるべきであり、考え抜いた末にそういう結論になるのであれば可なり。

たぶん私の意見は間違っているのだけれど、TOEICは、聞く、話す、読解する能力を試験しており、英文学の名著の解釈ができる能力を測っているのではないと思います。工学部ではそこの能力は測らないほうが、英文を読みこなすだけでなく、味わうことができる学力が付くことを期待していますが、この制度で十分ですか？

語学はコストに増強しないと、密に立たなくなるので、よりグレードの高い講義、例えば、ネイティブと free discussion ができるような講義を受けることができる権利を与えたいかと思えます。

大学で全く講義を受ける必要が無いケースも出てくるということでしょうか。大学としては人件費抑制には効果があるかもしれませんが、現在何卒(？)の留得免除を受けているのでしょうか。最近コマ回りは大学に比べて授業が必要なものレベルを定めているのが良いかと思えます。

全学共通教育の英語の目標があるかと思う。TOEICでよい点を取れるような学生を養成するのが目標であれば、このような制度も良いと思う。ただし、単位を認定するだけでなく、TOEICが何点以上であれば(度)、何点何点以上か、成績をつけたほうが良いと思う。GPAやGPT(成績)を決めるという理念も、単位認定という制度とで基本的な考え方に違いがあり、学生が理解しにくいと思う。

履修を免除された学生に対し、上級コースを用意すべきである。

できるものに単位を授けるのは良いと思うが、この単位のために必要単位が充足され、他の勉強をしなくなるのでは危ないかと思う。このようにしないような制約が必要。

それならば、英語の履修をすべてTOEIC集点(成績)でも置き換えるべきである。

単位数をどこまでにするかはともかくも、大学の講義の単位を絶対しないためにも他大学の単位互換制(考え)を積極的に活用するべきである。

世界的な意味での資格は大学の単位として読み替えても差し支えないと思う。日本しか通用しない資格というのはインターナショナル化に逆行している。

(1=賛成、2=反対、3=提案・疑問)

25

**Q-5 自由記述**

英語教育は、講義リポーターだけで済ませたいとは思いません。

1年生の全学共通教育では、学部の基礎教育が、本、全に集中し、1日に4〜6コマの超過時間制となっている。それでは、学生がしっかりと基礎の力を付けにたい制度となっている。早急な改善を望む。産業界から来たばかりで、ビントのずれた意見ばかりかもしません。お許しください。会社側の意見では、大学では基本を学んでほしいと思っていますが、それは決して専門科目の学力だけでではなく、(不思議な言葉ですが)いわゆる人間力(意欲、責任、他人の意見を聞き入れる度量など、と書かれる場合もあります)をもっている人が選ばれます。そういうことが身に付くプログラムになっているのでしょうか？検討いただければ、幸いです。

英語能力を向上するため、大学内で週2回 English Day を実施することが有効だと考えています。学生にそのような環境を作っておかないと、なかなか英語を使う機会がないと思います。また、サークルへの参加を必修科目にすることも良いと思います。

教養教育の問題は、科目ではなく実施体制に一番の問題があるのではないかと思います。極端に言えば、全員が(実質的には)非英語母語では、どうやってもうまくはいけません。

専門学校との差別化を考え、学生には幅広い教養や基礎を身に付けさせるべき。また、そのための教員は大学の将来が自身の職に影響する常勤職員で確保すべき。各学部の専門の教員を減らしても、あるいは専門の学科を減らしても教養に力を入れられないと、専門学校を出た学生の方がまし、という状態になりかねないとの危機感を持っている。また、同時になるべく基礎的講義の履修で卒業後とする学生を減らし、同じ授業なら多くの勉強をしないと勘だとと思われる学風の形成が必要だと思う。大学入学直後の教育が大学全体の雰囲気形成する一番大事な場所ではないかと思う。

意見を求められる時間的余裕がなさ過ぎることも自身が、この問題の位置付けの弱さを反映していると思う。

26

**Q-6: 各学科では英語教育を行っています、どのようなポリシー／到達目標の下に行なっていますか？**

テクニカル英語(工業英語、専門英語)の資料を教材にして、専門用語を含んだ英語を読む力(語解力)を身につけてもらうことを目的としています。

専門英語になれることにより、研究室に配属された後、各自の研究テーマに関連した論文を読むことに必要な抵抗を克服すること、また、話しでもスムーズに読めるようになることが到達目標です。

シラバスに記入の通り

全学共通教育で学んだ英語を英語能力をさらに高め、社会に出て役立つ英語能力の習得を目指す。

機械工学分野の教科書や雑誌記事などを読むことができるようにすることを目的とする。

卒業研究の過程の中では英文の研究論文の読解に取り組むことが必須であり、それに向けての準備として、教養・物理における基本的な専門用語や理工学系学術論文特有の言い回し、表現等を修得することを目標としている。

3年次のテクニカルイングリッシュを必修として、英語(筆記・聞き・書き)のスキルアップをめざす。

基礎的な英語の能力をつけることにより外国人との交流がやりやすくなること。研究室に配属されてから実際の論文から英語を読み取ることができ、それらの言語的・文法的な能力を養う必要性がある。

人間情報システム工学科では、英語教育に関して二つの目的を掲げています。1つは、英語を用いて、簡単な工学的問題について討論およびプレゼンテーションを行うことができるようにすること、ネイティブスピーカーによるイングリッシュおよびプレゼンテーション指導を実施しています。2つ目は英文の技術論文やテキストを読み取る英語力を育てること、読解英語の読解力および語彙力の教育を実施している。

工業英語 I について

・ネイティブスピーカーの教師の指導により、英語による討論およびプレゼンテーションの定石について学び、簡単な学問的問題について実際に演習を行う。

工業英語 II について

・初歩的な社会基礎工学に関する内容の講義を英語で受け取り、簡単な文献(教科書レベル)の講義を行い、専門的知識を英語で修得する習慣をつけ、方法を学ぶ。

・学生を英語学専攻の履修に引き付け、それぞれの履修に対し、分野が異なる4名の教員による授業を通じて、社会基礎工学における幾つもの専門分野の知識を英語で習得する。

・中間試験と期末試験を実施し、学生の達成度を評価する。

27

**Q-7: 大学院生に対する教養教育について何か検討もしくは実施していますか。あるいは全学レベルで検討して欲しいことがありますか。**

博士前期課程の履修基準

授業内容	修得単位数	備考
講義	16 単位以上	基礎科目・コア科目・専門科目・学際科目・選択科目
特別講義	2 単位以上	
演習	4 単位以上	
特別研究	8 単位	
合計	30 単位以上	

選択科目: 実践英語・インターンシップ

学部において、工学・技術を学んだ後に、人文系、社会科学系のカリキュラムを含めた教養教育科目が有効

28

**Q-8: 今後10年程度先まで展望した上で、本学における教養教育の実施体制はどのようなべきだとお考えですか？(例えば①全学共通教育体制を廃止し、教養教育は各学部で実施する、②教養教育に責任をもつ学部を設ける、③現在の5学部構成を再編し、人文・社会科学系学部を増やした上で、全学動体体制を維持する、④その他)**

個人的には、やはり教養教育に責任をもつ教員群を設けることが必要だと思っています。その中には化学、物理、生物、数学など理科系教員も含まれるべきであると思います。教養教育実施をミッションとする教員ですから、その教員の個人評価もそういう視点で行うべきです。不足分は専門学部の教員がお手伝いすることは当然ですが、責任部隊がないと、やらされるだけの意識で、教養教育は次第にすたれてゆくだけのような気がします。

②案(教養教育に責任をもつ学部を設ける)を提案します。

教養教育全体について立案計画を担う専任教員の組織があり、その提案に基づいて現行のような全学体制で臨むスタイルを希望します。

29

**「学士力」を定義 中央教育審議会**

【知識・理解】

- 異文化の理解
- 社会情勢や自然、文化への理解

【汎用的技能】

- コミュニケーション能力(日本語・外国語)
- 情報活用力
- 論理的思考力

【態度・志向性】

- チームワーク、リーダーシップ
- 倫理観
- 生涯学習力

【創造的思考力】

- 知識、技能、態度を総合的に活用し、問題を解決する能力

大学全入時代

↓

出口管理の強化

卒業認定試験の実施(学習成果の証明)

30





## 私見



教養の講義は身に残る

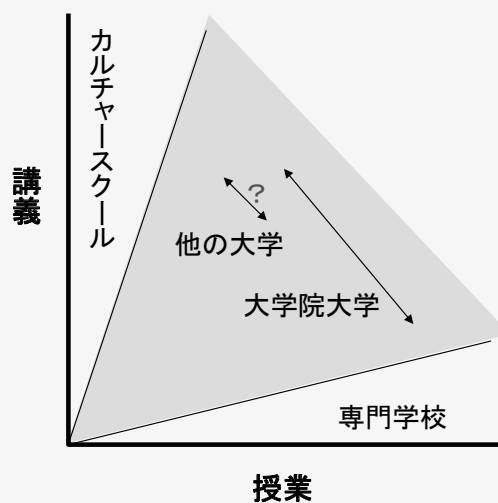
私のひそやかな分類:

講義: 第一人称、知恵、研究の経験知  
考える力、教授の本懐

授業: 第三人称、知識の伝達  
考える材料、講義のために教育

技術力 (特殊化)  $\longleftrightarrow$  ? 人間力 (調整力)

Policyとして  
岐阜大学は、どこに設定?



## 私見

### 専門に溶け込む教養

- 大学Policyの中で、自分の講義／授業を意識
- 講義: 向上の意欲を刺激  
(総合的に考える力を身につけさせるのが、  
岐阜大学の学生には大事では?)
- 授業: 基礎知識の確保から  
(一部の科目は教養センター専任集団が必要かも?  
=リメディアル、外国語、ネイティブ、社会通念、理系基礎etc)
- 教養教育の流れ:  
(とくに英語授業、および、学部にある教養基礎、  
これらについて、学部で再checkが必要かも)
- 考える場の一元化:  
(審議の流れの整備)

## 第2部 「授業分野の現状と問題点」

### 1. 人文科学系

プレゼンター 人文科学部会 山田敏弘 准教授

## H19教養教育FD 人文分野の現状と問題点

---

教育学部国語教育講座  
准教授 野村主任の代理  
山田敏弘

### 人文分野の授業科目

---

- 数
 

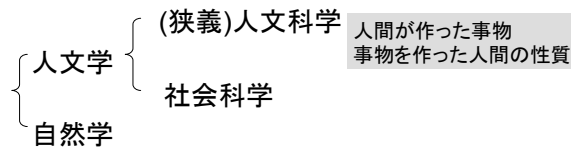
	H16	H17	H18	H19
人文	51	51	59	56
社会	46	46	48	49
自然	60	60	46	47
- 授業科目(H18年度)
  - ◆ 哲学・思想分野(13)      ◆ 心理・行動分野(11)
  - ◆ 文学・言語分野(11)     ◆ 美学・芸術分野(10)
  - ◆ 歴史・人類学分野(13)

### 人文分野の授業に対する授業評価

---

※ 評価結果は、各科目の授業評価結果を平均したものである。

## 人文分野に求められる授業とは



- バランス良く全般的に？ それとも、個別から領域前部を見渡す？
- むしろ学部教育とは対極にある分野が重要？

## 問題点

### • 人文分野(に特有?)の問題点

- ◆ 分野内での偏り  
例 外国語文学分野の問題
- ◆ 受講生数(右表)
- ◆ 受講制限のありかた  
既習科目指定など  
高いハードルによる排除
- ◆ 担当部局の偏在

月1	219	16		
月2	150	59	58	58
月3	46	6		
月4	50	43	26	
月5	35	44		
火1	60	122		
火2	100			
火3	31			
火4	73	50	59	
水1	162	103	8	
水2	101	123		

## 「言語学 I (岐阜の方言)」を例に

- 大講義故の問題点と解決の工夫
  - ◆ 選抜方法 300⇒160
  - ◆ 授業形態 AV教材の導入  
ロールプレイ、毎回調査の宿題
  - ◆ 学び方の育成 教科書 兼 ノートの作成  
2度提出させてチェック
  - ◆ レポート 書き方はどこで教える？

## 「言語学 I」を例に

- 改善してほしい点
  - ◆ TAの導入 (毎回でなくてもよい)
  - ◆ 授業用資料作成の下請け化

⇒授業者の努力だけではなく、  
大学のサポート態勢の充実をお願いしたい

## 2. 社会科学系

プレゼンター 社会科学部会主任 近藤 真 教授

### 社会科学教育分科会からの報告

はじめに

1. 社会科学教育分科会の現状と問題点
2. 教養教育における社会科学教育とは何か
3. 教養教育における憲法教育の現状と問題点
4. 今後の社会科学教育分科会の課題

むすび

はじめに

これまで社会科学教育分科会は、事務的に必要なこと以外はあまり活動をしていない。たとえば教員の入れ替わりに伴う新たな科目の設定、カリキュラムの変更や夜間主コースの担当教員の手配などである。それ以外には、会の目的や活動の内容が不明確だったからでもある。今後の活動を考えるに当たり現状の社会科学教育分科会のデータを分析して若干の問題提起をしたい。

#### I. 社会科学教育分科会の現状と問題点

##### 1. 現状

- ①社会科学教育分科会の参加メンバーは、全学に44人おり、2007年度では37人が出動した。
- ②教養教育における社会系科目の開講コマ数は、2007年度では34コマである。
- ③各学部の社会系教養講義科目コマ数の引き受け分担は、教育学部14科目、地域科学部15科目、医学部1科目、応用生物科学部4科目、合計34科目である。
- ④各社会系講義科目の平均受講生数と平均成績および単位取得率は、69～100%である。
- ⑤基礎科目などの教養への開放については今後調査する。
- ⑥社会系科目の学生の授業評価については調査結果を待って分析する。
- ⑦社会系科目の教員の自己評価については調査結果を待って分析する。

##### 2. 仮説的な問題点

- ①学部内の教員の交代により、カリキュラムの科目編成が次第に変わることは、教養科目が全学出動体制の下で特定教員に偏らず良いことであろうが、必要な科目は適切に配置されているのであろうか。教養部があった時代には教養科目は教養教員の顔ぶれで決まり、どのような科目が学生に教育されるべきかは、教養部教員の採用あるいは純増の問題であった。教養科目は固定的で極めて限定され、実際、柔軟な科目の多様性は非常勤講師に依拠していた。非常勤講師を中心とした教養科目の編成は2007年度から刷新され、その体系性にも教養教育推進センターの努力によって高められている。これらについても今後検討する。
- ②これまでは、事実上科目編成が学部の事情次第になっており、欠員が出たら数あわせで補充を行うだけになっていたように思われる。非常勤講師の削減のため、ますます科目編成の構造的な体系性から遠のかざるを得ない現状であるといえよう。社会系科目に体系性が要求されるとすればどのようにか。社会系教員のコンセンサスを得て構造的な配置が科目編成に必要である。この問題の解決のためには本格的な調査が必要である。これについても今後調査を行いたい。

## Ⅱ．教養教育における社会科学教育の科目配置と修得システムの基本的視点。

### ①教養教育における社会科学教育とは何か。

私は、教養社会科学教育に必要な普遍的な目的と達成すべき方法は以下のものと考えている。これをまた各専門科目は個別具体的に分化して考えねばならないであろうが、実際には、それは各教員の普遍と個別の認識にかかっており、各自が検討して各講義の目的と方法が設定されていくのである。私の考えとは異なる考えがあるので、この意見でまとまるとは思わないが、とりあえず仮説的に提示しておきたい。

#### 1. 目的

- (1) 合理的精神により社会現象を科学的法則的に認識する知識技能を修得すること。
- (2) 批判的精神により社会の矛盾や問題点の発見・調査・分析能力を養成すること。
- (3) 勇気と良識を持って社会に対して能動的に働きかける姿勢を培うこと。

#### 2. 方法

- (1) 社会とは人間関係の総体であるので、社会現象を総体として科学的法則的に認識するためには、生産と消費の経済活動をめぐる人間関係、国家や法秩序の政治活動をめぐる人間関係、宗教や社会観の思想活動をめぐる人間関係の三分野に関する科学的法則的認識が必要である。したがって概ね、経済学、法学国家論、社会哲学は社会科学分野の修得に最低限必要と考えられる。
  - (2) 人権を守り、主権者として行動するために、批判的精神、合理的精神をもって社会を科学的法則的に認識し、社会に問題提起する「不断の努力」が憲法12条によっても要請される。
- ②教養教育における社会科学教育の科目配置については今後社会科学分科会メンバー等に教養社会系科目の普遍と個別の目的方法から、重要な教科の配置の方法についてまでもアンケートなどをもって検討したい。

## Ⅲ．教養教育における憲法学教育の体験的問題点

報告では省略したが、ここで述べておきたいことは憲法の授業の理解としてフランス人権宣言やアメリカの独立宣言や明治憲法や日本国憲法の講義を理解するためには、なぜそのような法律や憲法が成立したのか、歴史的社会的な背景理解がないと法律や憲法の条文のもっている本質的な意義を理解できない。したがって世界史の、少なくとも近代世界史の基本的な知識と日本の近現代史の基本的な知識が不可欠であるということである。しかるに学生たちはあまりに表面的で薄弱な歴史理解しか持ち合わせておらず、勉強しているはずの日本史も世界史も高校でやってないので何も知らないと応える学生たちが多すぎるのが現状である。政治経済文化の基本構造と歴史的な流れを理解して初めて憲法や法律の歴史的社会的意義を理解できるのである。したがっていかなる政治経済文化の知識が必要なのか、教養社会系カリキュラムで足りないものは何かなどについて検討して教養社会系のカリキュラム改革案を提示していきたい。

## Ⅳ．今後の社会科学教育分科会の課題

- ①教養教育における社会科学教育の科目配置については今後社会科学分科会メンバー等に教養社会系科目の普遍と個別の目的方法から、重要な教科の配置の方法についてまでもアンケートなどをもって検討したい。
- ②今後、配置すべき社会系科目は何かの調査をするにあたり、各講義に必要な予備知識が何なのかを調査するべきであろう。学生たちが必修、または選択で習得すべき教養の社会系科目とは何か調査検討する。

### むすび

社会科学教育分科会についてはこれまで役割が不明確であったが、教養社会科学教育のトータルな問題分析についてひとつずつ具体的に今後検討して行こうと思う。

### 3. 自然科学系

プレゼンター 自然科学部会主任 若井和憲 教授

## 自然科学系授業編成部会・報告

昨年の自己点検評価・外部評価を中心に

主任・若井和憲

平成18年度カリキュラム改定により、以下の4分野に分類、その改定に伴い、総合科目との出入りも有った。

分 野	開 講 コマ 数
①自然科学概論分野 総合的視点に立つ自然科学の概要を説く科目	物理学 2コマ、化学 4コマ、生物学 1コマ、 地学 3コマ、数学 2コマ <b>計12コマ</b>
②自然科学入門分野 文系学生対象の基礎的入門科目	数学2コマ、物理学3コマ、化学2コマ、生 物学1コマ、地学1コマ、物理化学・1コマ <b>計10コマ</b>
③自然科学基礎分野 理系学生対象の学際的・融合的自然科学基礎科目	数学5コマ、物理学4コマ、化学4コマ、生 物学8コマ <b>計21コマ</b>
④リメディアル教育分野 入試の多様化を考慮した補修教育的科目 (出身高校が職業教育を主とする学科卒業生のみ対象)	数学1コマ、物理学1コマ、生物学1コマ <b>計3コマ</b>

## 問題点

### ②文系学生対象科目と、③理系学生対象科目について

- ・学生側から見て、文理境界領域の学生が居て、どちらか迷う
- ・事務サイドから見て、事務処理を短い履修届期間にチェックできない。
- ・教育上、上位志向の文系学生には③を受講させることに意義がある。

### ④のリメディアル科目について

- ・この科目を受講しなくても、単位は充足できる。
- ・経験豊かな他大学の例でも、この種の科目は、真に受講すべき学生が敬遠、十分能力がある学生が受講する傾向がある（取りやすい科目を受講する傾向）。
- ・必修化にも問題あり。すなわち、一般教養科目のGPAで、専門科目学生が必ずしも低位置に居るわけでなく、かなりの割合で、非常に高位置に属する例がある。
- ・リメディアル科目については、28日に集中的・詳細に議論していただく。

## 受講学生の授業評価アンケートから

- ・教える先生の強い熱意が感じられた(多数)
- ・授業に出なくても単位が出る授業もあれば、密に出席しても半数が落とされる授業もあり、あきらかに不公平。授業間格差の是正を望む。
- ・①概論分野であっても、かなり専門性が高かった。
- ・未履修者であるが、概論で理解が深まった。

## 授業担当者の授業評価アンケートから

- ・①概論分野でも、受講生が理系出身か文系出身かで難易度が違う
- ・同じ理系でも、土木から化学系まで受講者の基礎レベル幅が広く、講義の焦点が絞れない。カリキュラム体系が曖昧では？
- ・①の概念分野といえども、学生層が広すぎる
- ・①の概論分野の有る科目を担当するが、高校の予備知識のない人が居れば、やはりやりづらい。

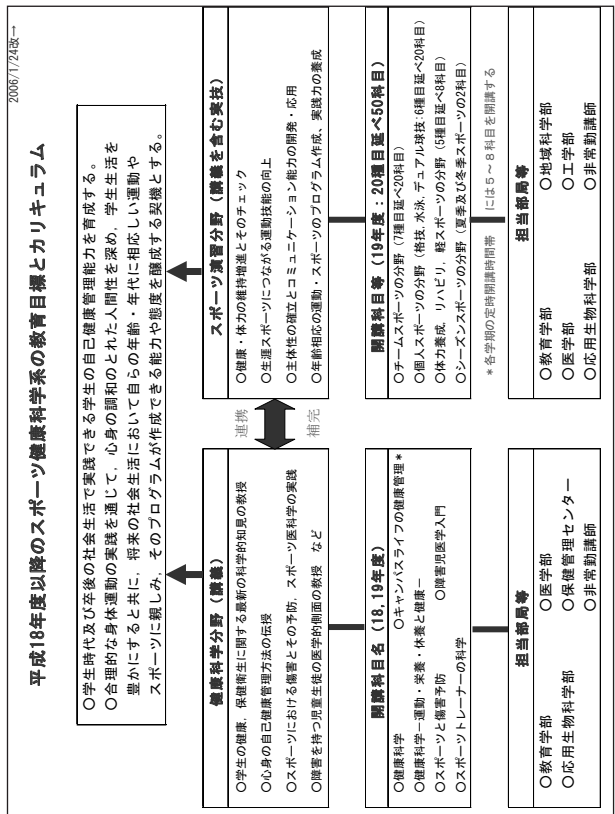


# 4. スポーツ・健康科学系

プレゼンター スポーツ・健康科学部会主任 川岸 與志男 教授

平成19年度  
岐阜大学教養教育推進センター  
第1回 FD研究会  
「授業分野の現状と問題点」  
@スポーツ健康科学系  
スポーツ健康科学部会  
川岸與志男

1. 現状  
■ スポーツ健康科学系の教育目標とカリキュラム



＜健康科学（講義）分野＞

■ 開講学期・時間帯、開講科目・その他

1. (前期)

時間帯	開講科目数	科目名	担当教員	所属	受入れ人数	H19希望人数	H19受入れ人数
月3	1	スポーツトレーナーの科学(総合実習)	河野 野	非	20	18	17
月3	2	スポーツと傷害予防	松岡 他	医	100	64	70
月4	3	健康科学—運動・栄養・体系と健康—	早川 他	医	100	73	90
				計	220	155	177

注：開講教員：コマ

2. (後期)

時間帯	開講科目数	科目名	担当教員	所属	受入れ人数	H19希望人数	H19受入れ人数
月2	1	健康科学	山本 他	保セ	100		
月3	2	スポーツトレーナーの科学(総合実習)	河野 野	非	20		
				計	120		

注：開講教員：コマ

3. 「キャンパスライフの健康管理について」の講義  
前・後期共に、スポーツ演習の初回講義時に実施（前期受講率は88%）。

## <スポーツ演習(実技と講義)分野>

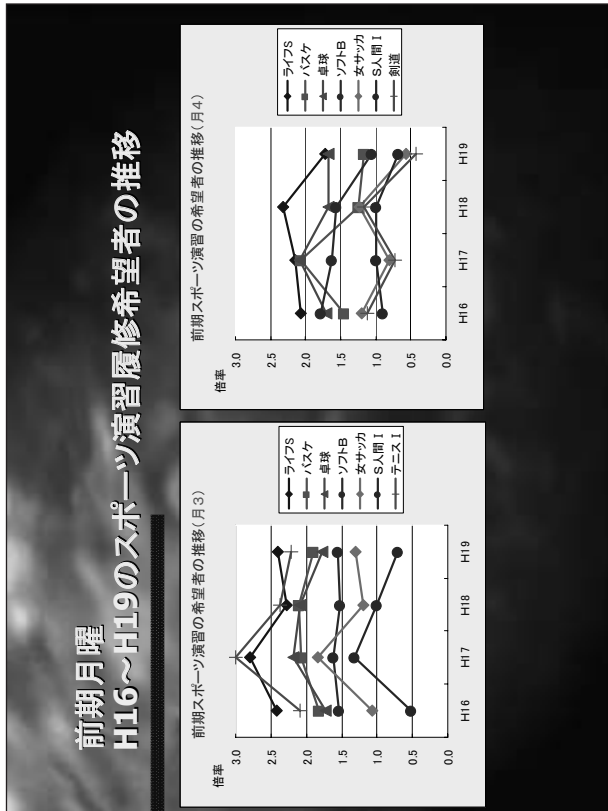
「開講学期・時間帯・開講科目・その他」

1. 定時コース
    - 1) 前期: 月曜日 3, 4, 5限 火曜日 3, 4限
    - 2) 後期: 月曜日 3, 4, 5限 火曜日 3, 4限
- ※ 開講科目(次のスライド参照)

### 2. 集中コース

- 1) 夏季休業中に合宿実習で実施
- 2) 冬季休業中に合宿実習で実施

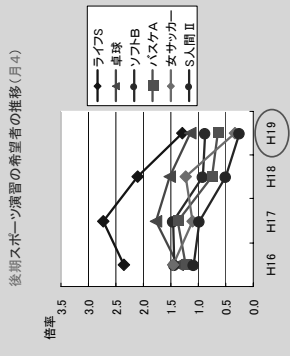
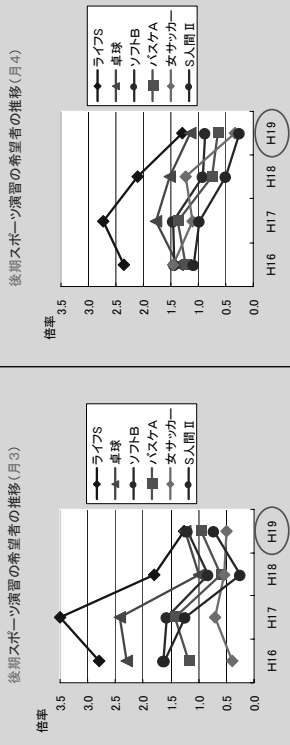
(前期)	時間帯	開講数	科目名	担当教員	所属	受入れ人数	H19希望者数	H19受講者数
月3	7	テニスI	松屋	工	24	53	23	
		ソフトボールI	麻原	非	48	75	47	
		バスケボールA	田口	非	40	76	56	
		卓球	岸	非	48	85	48	
		女子サッカーI	井上	非	30	39	37	
		スポーツ人間II-スモールフィールドサッカーI-	花井	非	40	28	33	
		テニスII	花井	非	40	96	42	
月4	7	ソフトボールI	麻原	非	48	51	48	
		バスケボールA	田口	非	40	47	47	
		卓球	岸	非	48	80	48	
		女子サッカーI	井上	非	30	17	21	
		スポーツ人間II-スモールフィールドサッカーI-	花井	非	40	27	33	
		ソフトボール	花井	非	40	69	42	
		テニスII	花井	非	40	31	31	
月5	1	スポーツ人間I-バレーボールの基礎と理論I-	近藤	保健	20	31	40	
		バスケボール	井上	非	36	128	41	
		テニスI	アノ	非	40	79	42	
		バドミントン	杉本	教育	40	61	93	
		ヨロエアロビス	熊谷	教育	35	99	51	
火3	5	卓球水泳	野村・阿部	成生	24	13	16	
		バレーボールで学ぶ	川岸	教育	50	86	78	
		テニスI	松岡	非	50	13	21	
		バドミントン	井上	非	36	103	40	
		テニスI	アノ	非	40	86	40	
集中	1	水泳スポーツで学ぶ	川岸・杉本	教育・非	30	34	33	
		28	演習	987	1525	1025		
					1科目平均	38	88.7	39.4



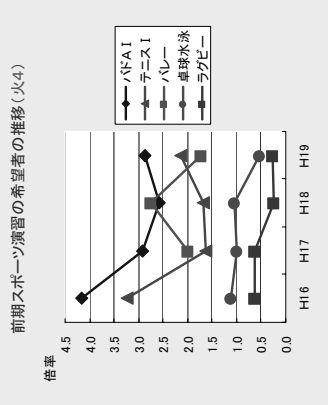
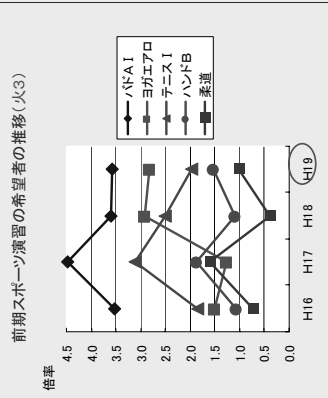
(後期)	時間帯	開講数	科目名	担当教員	所属	受入れ人数	H19希望者数	H19受講者数	
月3	6	女子サッカーII	井上	非	30	15	15		
		ソフトボールI	麻原	非	48	58	48		
		バスケボールA	田口	非	40	38	38		
		卓球	岸	非	48	60	48		
		スポーツ人間II-スモールフィールドサッカーII-	高橋	非	40	29	29		
		ライフスポーツ	花井	非	42	53	42		
月4	6	女子サッカーII	井上	非	30	10	10		
		ソフトボールI	麻原	非	48	42	42		
		バスケボールA	田口	非	40	26	26		
		ソフトボール	花井	非	48	55	48		
		スポーツ人間II-スモールフィールドサッカーII-	高橋	非	40	10	10		
		ライフスポーツ	花井	非	42	54	42		
月5	1	新体操(ダンス)	柳井	工	40	51	40		
		テニスII	野村・阿部	成生	30	28	28		
		バドミントン	井上	非	36	79	36		
		テニスII	アノ	非	35	36	36		
		バドミントン	山橋	教育	30	21	21		
火3	5	水泳	清水	工	25	31	30		
		ソフトボールII	原田	教育	40	28	28		
		バドミントン	井上	非	36	68	36		
		テニスII	アノ	非	35	43	35		
		バドミントン	香田	教育	15	4	4		
集中	1	水泳	清水・原田	非	25	33	30		
		女子サッカー	川岸	教育	40	39	39		
					28	演習	883	911	761
					1科目平均	340	350.3	290.3	

(後期)	時間帯	開講数	科目名	担当教員	所属	受入れ人数	H19希望者数	H19受講者数	
月3	6	女子サッカーII	井上	非	30	15	15		
		ソフトボールI	麻原	非	48	58	48		
		バスケボールA	田口	非	40	38	38		
		卓球	岸	非	48	60	48		
		スポーツ人間II-スモールフィールドサッカーII-	高橋	非	40	29	29		
		ライフスポーツ	花井	非	42	53	42		
月4	6	女子サッカーII	井上	非	30	10	10		
		ソフトボールI	麻原	非	48	42	42		
		バスケボールA	田口	非	40	26	26		
		ソフトボール	花井	非	48	55	48		
		スポーツ人間II-スモールフィールドサッカーII-	高橋	非	40	10	10		
		ライフスポーツ	花井	非	42	54	42		
月5	1	新体操(ダンス)	柳井	工	40	51	40		
		テニスII	野村・阿部	成生	30	28	28		
		バドミントン	井上	非	36	79	36		
		テニスII	アノ	非	35	36	36		
		バドミントン	山橋	教育	30	21	21		
火3	5	水泳	清水	工	25	31	30		
		ソフトボールII	原田	教育	40	28	28		
		バドミントン	井上	非	36	68	36		
		テニスII	アノ	非	35	43	35		
		バドミントン	香田	教育	15	4	4		
集中	1	水泳	清水・原田	非	25	33	30		
		女子サッカー	川岸	教育	40	39	39		
					28	演習	883	911	761
					1科目平均	340	350.3	290.3	

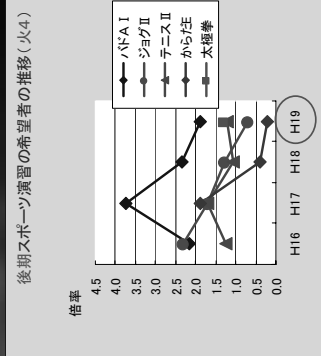
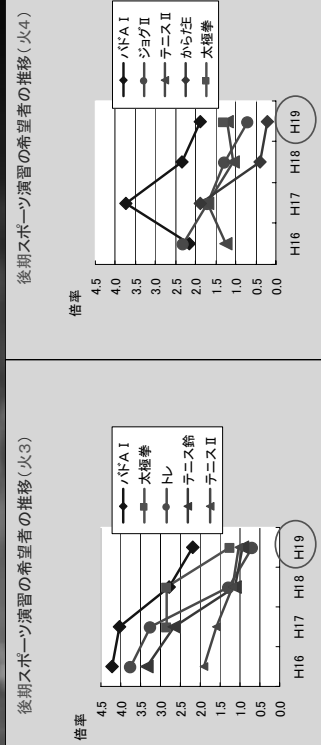
## 後期月曜 H16～H19のスポーツ演習履修希望者の推移 ※ H19は9月24日現在



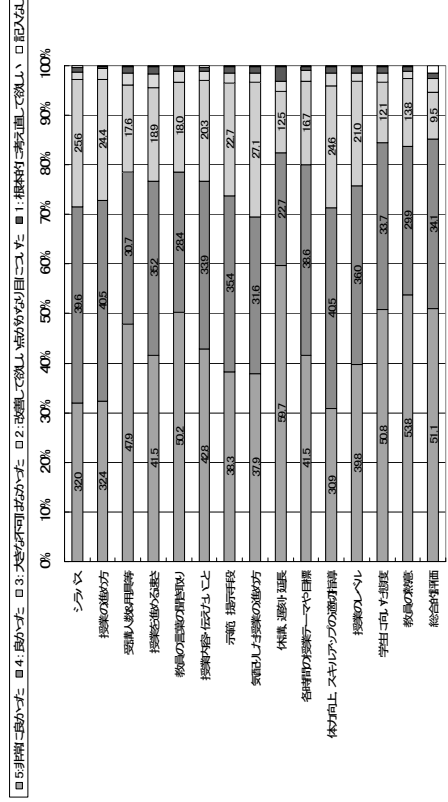
## 前期火曜 H16～H19のスポーツ演習履修希望者の推移



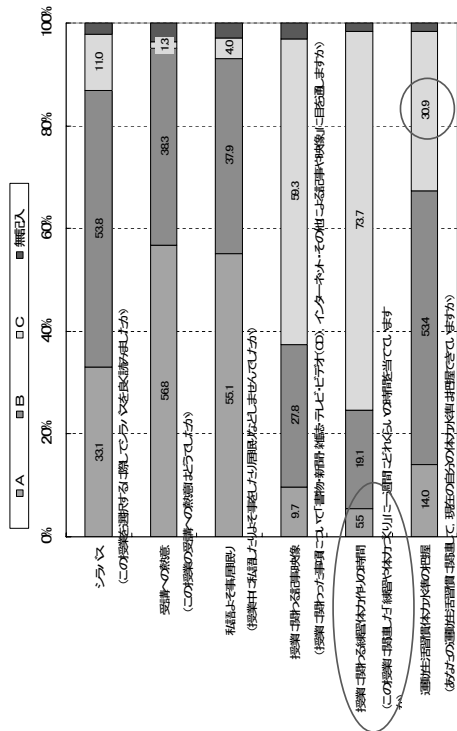
## 後期火曜 H16～H19のスポーツ演習履修希望者の推移 ※ H19は9月24日現在



## H18後期 学生の受業科目(スポーツ・健康科学系)



### H18後期 学生の自己評価(スポーツ・健康科学系)



## 2. 問題点・今後の課題

【スポーツ演習】(「ヒト、モノ、カネ、情報」: 対応策検討中)

### I 安全管理上の問題について

1. 不測の事故・被害
  - 1) ケガ、熱中症等の応急処置 → 各施設「救急箱」常備  
→ ひとりあえず全共及び保体棟事務室に「一つ」...
  - AED: 全共及び保体棟事務室に「一つ」...
- 2) 救急体制 → 「緊急連絡網」を再整備
- 3) 盗難多発 (注意喚起のみの対応では不十分?)  
→ それぞれについて、事前の注意喚起の周知徹底
- 4) 自然災害 (地震・ など) 時の対応

### 平成19年度前期バレーボールで学ぶ「単独調査

Q: おがたにとって、大学生時代に身体運動(運動、スポーツ)の授業は必要ですか?

学部	必要		回答者計	未提出	受講者計
	(必修で)	(選択で)			
1. 教育	9	3	12	0	12
2. 地域	2	2	4	3	7
3. 医	4	0	4	0	4
4. 工	17	27	44	5	49
5. 応生	1	4	5	0	5
計	33	36	69	8	77
%	47.8	52.2			回答率: 89.6%

## 2. 施設、設備の整備・管理が不十分!

- 1) 更衣室、シャワー室等の整備・管理
- 2) トレーニング室内の設備機器の老朽化・不備  
→ H19GP(学生支援)で順次整備される予定!
- 3) 屋内: 体育室フロアのささくれ、ラインの剥がれ、  
etc
- 4) 屋外: プール槽の歪み、芝生(雑草?)の管理、  
ハードコートへのひび割れ、etc

第2体育館管理室の

- ・窓ガラス破損
- ・侵入(H18年4月):



午後11時過ぎ:  
トレーニング室北側の  
窓は開けっ放し...  
(H18年4月):



トレーニング室北側の  
窓ガラス破損(H19年7月):  
授業外でトレーニング機器  
使用(遊んでいた?)学生  
かゲガ(救急車要請)

※このような場合は即修理  
される。



授業用の用具庫の破  
損(鍵が壊される)  
(H18年5月):



サッカー場での授業風景  
H18年5月：撮影



コート面の凹凸・排水不備：  
今年の東海地区国立体育大会  
(6、7月)に間に合うよう芝生が  
一部張替えられた。(改修費：  
800万円弱?)



しかし、  
屋外更衣室付近の  
排水工事は...?  
H18年5月：撮影

屋外体育施設敷地  
内に建造された  
パラポラアンテナと  
附属建物



屋外ハンドボール  
コートの  
水はけ具合(現状)

### Ⅲ 担当者の現状

- 1) 専任教員の不足＝非常勤教員に依存
- ・今後の課題→優秀な非常勤教員の確保

担当教員の所属部署等

学部等	担当コマ数	担当教員数	備考
教育	10	8	3科目担当1名
地域	1	1	
医	2	12	3科目担当1名
工	3	3	
応生	3	6	他部高協力あり
保	1	2	他部高応援あり
計	20	32	
非常勤	38	11	
合計	58	43	
開講コマ数	55		※非常勤・非常勤での複数担当あり

## 5. 総合科目

プレゼンター 総合科目部会主任 松本康夫 教授

センターFD研究会2007

# 「総合科目」の現状と問題点

総合科目部会主任  
松本康夫

センターFD研究会2007

## 総合科目とは？

- 平成18年度から始まった新たな『総合科目』  
「学問の全体像を把握する努力をしながら、分野横断・文理融合的に総合的知識の獲得と理解力・判断力・発想力を養うための科目」
- 従来の総合科目と個別科目の曖昧な区分、開講科目数のバランスを見直し、7分野に分けて開講  
教育目標→「生涯の知的活動に必要な動議付けと総合的判断力を身に付ける」
- 高学年次履修(学部事情に配慮)  
前、後期に1単位科目(当初19, 19年度16)を新設→選択肢
- 開講科目数→従来の31から73(単位数換算127)  
各学部で総合科目の必修単位数の増

自己点検・評価報告書2006, p14

## 7つの分野

- ① **情報と物質** (8): 数学的思考法, 情報の概念, 物質の捉え方および自然の階層性, 自然科学の社会性の基本的把握
- ② **地球と環境** (17): 地球的視点による多様な環境問題へのアプローチ, 環境的視点による人間活動の把握
- ③ **生命と生活** (19): 生命科学と社会的営みとの関連性および人間学への理解
- ④ **人間と文化** (9): 人間活動の社会的側面の理解および文化と科学技術・産業の歴史的多様性の把握
- ⑤ **医療と保健** (6): 人々の命と健康をめぐる諸問題と医療医学的考え方の理解
- ⑥ **大学と地域** (5): 高等教育機関と地域のあり方の総合的把握
- ⑦ **知の技術** (9): 文章を作ったり発表したりする知的素養の向上, 知的財産・古典への理解

自己点検・評価報告書2006, p14

## 分野ごとの開講状況

平成19年度

分野	科目数	開講時期	担当教員所属	受講者(前期)
情報と物質	8(2)	前4,後4	工8	42~100
地球と環境	17(5)	前8,後9	教1,工5,応生9, 流域2	33~182
生命と生活	19(5)	前12,後7	教1,医6,工3,応生8, 連獣1	36~130
人間と文化	9(0)	前6,後3	教1,地域3,工3, 応生2	15~148
医療と保健	6(0)	前3,後3	医6	50~151
大学と地域	5(1)	前1,後4	教3,地域1,副1	67
知の技術	9(3)	前2,後7	地域1,工2,応生1,産 セ1,学2,副1,教セ1	13~100
計	73(16) ( )1単位科目	前36,後37	教6,地域5,工21, 医12,応生20,他9	—



## 指摘された問題点

- 「総合科目」という科目  
「総合といっているけれど(授業のやり方,内容からして)その意味が分からない」「自然系の個別授業と何ら変わらない」  
一部の授業「ただ教員がクルクル変わって講義するだけのことで,全体的なテーマの一貫性もなく,何を授業しようとしているのか不明」
- 基礎と応用の狭間  
学生から「レベルが高すぎてついていけない」「文系にも分かり易い講義だと思った。自然科学の知識がほとんどない学生には難しい」  
「先生によっては,自分の担当部分を2回ばかり全く独自に専門的に講義しておしまい」「高校で生物をとっていないので専門用語の解説をしてほしい」
- 1単位科目の是非  
学生は「やりにくい」「15回聞きたかった」「意味は分かるが,組み合わせの選択肢が少なすぎる」「短期集中できて歓迎」  
教員から「やりにくいので,2単位ものに切り替えたい」  
H18教員アンケートでは,○3,×4 H18学生アンケートでは,○14,×30

## 「総合科目」の展開方向

- 「総合科目」  
文系か理系か,文理融合の難しさ→テーマが特定できないから「総合」  
当初,「分野横断的テーマ」「現代社会の諸問題」  
実質的に自然系分野と変わらない展開?
- 基礎と応用  
学際的科目の広範さ 基礎知識(自然系科目からの橋渡し)  
分担授業→テーマが曖昧,教員間の合意形成
- 1単位科目  
教員のやり易さ,とくに後半担当の不満→前後半の科目組合せ  
できたら2単位科目に

学部教員の教養教育参画(善意の動機づけ)  
教員のノルマ意識と学生の学ぶ姿勢  
学生参加型授業と受講者制限

## 6. 既修外国語系

プレゼンター 既修外国語部会主任 伊藤 徳一郎 教授

### 平成 19 年度教養教育推進センター第一回 F D 研究会 既修外国語部会：現状と問題点

#### I. 【 現状 】

##### 【 開講科目 】

授業科目名	内容 (目標)	クラス形態	履修法	単位
英語 A 1、A 2	主に語彙力と構文力の増強に努めるクラス	指定	必修	4 (2 科目)
英語 B	多様な学習希望・目標に応じたクラス	選択 (シラバスによる)	選択必修	2 (1 科目)

※全科目、1 年次受講

##### 【 クラス展開 】 (学部・学科・学期別)

教育学部：	英語 A1 (前期) ; A2 (後期)	18 クラス (各 9)
	英語 B (後期)	10 クラス
地域科学部：	英語 A1 (前期) ; A2 (後期)	6 クラス (各 3)
	英語 B (後期)	5 クラス
医学部 (医)	英語 A1 (前期) ; A2 (後期)	6 クラス (各 3)
	英語 B (前期)	4 クラス
医学部 (看)	英語 A1 (前期) ; A2 (後期)	6 クラス (各 3)
	英語 B (後期)	4 クラス
工学部	英語 A1 (前期) ; A2 (後期)	36 (各 18) + 2 (夜間主・再履修) = 38 クラス
	英語 B (前期)	20 クラス
応用生物科学部	英語 A1 (前期) ; A2 (後期)	14 クラス (各 7)
	英語 B (後期)	8 クラス

総計 139 クラス (月・火・水曜日、午前 1・2 時限開講)

※その他、上正規クラス外にリメディアル・クラス =  
2 コマ (前・後期各 1 コマ) 開講

##### 【 担当者 】 (コマ数・常勤・非常勤・NS 別)

担当コマ数 → 139 コマ → 常勤 (41) + 非常勤 (98)

常勤 → 27 名 → 教育 (8) ; 地域 (7) ; 医学・医 (2) ; 医学・看 (1) ; 工学 (7) ; 応用生物 (2)

NS (ネイティブ・スピーカー) → 6 名 → 常勤 (2) ; 非常勤 (4) → 25 コマ (クラス)

#### II. 【 課題 】 —— 【 学習量不足 】 の克服

【現状】 → 全学共通教育における「英語教育」の最も大きな問題は、何と云っても、上記【開講科目】に示されるように、履修する期間や履修する科目に限られ、学習量が少ないことに尽きる。履修期間は入学初年度の 1 年間 (しかも月・火・水の 3 日間!) に限られ、履修科目は最大でも 3 つ、最小の場合は 2 つだけである。

実は、これは、教養部と一般教育課程 (1 年半) が廃止され、「現実」的なカリキュラム「改

革」が行われた結果である。つまり、英語教育が教養（全学共通）部分と専門教育部分とに二分されたことによる当然の帰結といえよう。現在、学部での英語教育を含めれば、1年半から2年間にわたって、4科目から7科目の間を履修する学習量となっている。とは言え、かつての英語の履修が入学後2年間にわたり、8科目・8単位（旧教養部時代）必修であった頃と比較すれば、隔世の感があるのも事実であろう。「現実」的な帰結には「現実」的な解決しか展望できない。それは、後述するが、量的な不足を質の向上で補うことと、「現実」的な量の拡充として人的資源（常勤・非常勤）を拡充していくことである。

【打開策】（学習量不足を質的にカバーする工夫・努力とその問題点）

- ① **必修科目（英語 A1, A2）の徹底化**→基礎学力（リスニング・スピーキング・ライティング・リーディング）の修得→教材・教育レベル・教育目標の適正化→単位の実質化の徹底（1単位から2単位に変更した意義—学習量の確保）
- ② **選択クラス（英語 B）、シラバスの充実化**→原則的に学部・学科の特性に応じた選択クラスを増やし、学生の主体的な意欲・関心にもとづいた、「能動的＝応用的」な英語運用能力の増強を図る（平成18年度より英語Bクラス増加、英語BのNSクラスは20人以下の少人数クラス、将来的には必修化も検討）→全学部教員の協力
- ③ **授業外での自学自習環境の確保・活用**→（学習支援体制の確立）→図書館のAVコーナーに自学自習用の英語教材配備；インターネットによる自学自習システム（アルクネットアカデミー）導入（平成18年度）；「英語学習相談室」設置（前・後期教員各一名、1コマ）（平成19年度）→後期1コマ追加
- ④ **専門教育との連携**→各学部・学科での英語教育と有機的連携を密にし、共通英語の学習不足を補う  
それと同時に、学生に英語学習の重要性・利便性を認識させ、モチベーションを高める→教材・教授内容の体系性、各学部教員の連携
- ⑤ **外部検定試験（英検、TOEFL、TOEIC）の活用**→資格取得者に対して、（本学共通教育の）英語の単位習得を認め、英語の自主的学習意欲を高める→学生への周知・助言と受け入れ体制の整備
- ⑥ **教員の指導情報の共有・充実**→センター試験の得点把握、シラバスの相互確認により、教員間の指導上の連携強化を図る→入試情報・シラバスの有効的活用
- ⑦ **英語リメディア・クラス**→平成19年度より、学力不足にかかわる取組の一環として、英語が苦手、できない学生を上記③の「英語学習相談室」にて支援。現在、その効果、問題点、今後の方向性等、検討中
- ⑧ **人員・予算の確保**→学習量の不足を質的努力によりカバーするといっても、おのずと限界がある  
学習量を増やす→修得単位の増加が必要→人員と予算の安定的確保

## 7. 未修外国語系

プレゼンター 未修外国語部会主任 松尾幸忠 准教授

未修外国語分野は、ほとんどの学生が大学に入って初めて接する、英語以外の外国語である。今日、英語教育の重要性が叫ばれるなか、その一方で多様な国々との交流も進み、英語以外の外国語の重要性も比例して増していることも事実である。実用的な流通言語としてとらえた場合でも、英語が使用できればすべて解決すると考えることは、これからの時代にあってはむしろ不適切であると思われる。国家や国民間の交流とは、政治や経済のみに限られたものではなく、言語を基盤とした異文化理解がその根底になくってはならないからだ。同時にまた、外国語の多様性を認識させ、英語の価値を相対的に見る目を養うという点でも、重要な意味を持っていると言えよう。

授業内容としては、実際の運用能力の初歩を身につけさせることはもちろん、併せてその言語の持つ文化的背景をも理解させることを目的としている。

### ○現状

#### 〔開講状況〕

未修外国語系科目は、現在以下の外国語が開講されている。括弧内は開講コマ数。

- ドイツ語 (前期 13、後期 13 <いずれも抽出含む>)
- フランス語 (前期 9、後期 9 <いずれも抽出含む>)
- 中国語 (前期 10、後期 13)
- ロシア語 (前期 2、後期 2)
- ポルトガル語 (前期 1、後期 2)
- 朝鮮・韓国語 (前期 1、後期 2)

#### 〔履修形態〕

全学共通教育における外国語の履修形態は、英語 A 1・A 2、未修外国語 I (各半期 1 コマ 2 単位) が必修、その他に英語 B または未修外国語 II (同) のいずれかを選択必修することになっている。即ち現状では、未修外国語の必修は週 1 コマ・半期分ということになる。

### ○課題

#### ①学習時間の量的不足

外国語学習において、その一定程度の能力を涵養するためには、学習「量」の確保が優先されなければならない。上記の通り、現状では、未修外国語の必修は週 1 コマ・半期分ということになっている。これでは運用能力についてはもちろんのこと、文化的背景を理解させるに当たっても、あまりに不十分であるとの声が教員の側からあがってきている。

#### ②開講時期の問題

年間を通じて非常勤講師を安定的に確保するという点から、現在のところ工学部・医学部看護学科は一年後期からの履修となり、選択必修の II は二年前期に開講されている。このため当該学部・学科には、II を履修したくても専門科目との関係から履修できない学生が出てきてしまっている。

### ○問題解決への試み

学習時間の量的不足の問題については、既修外国語部会の方でも同様の悩みを抱いていた。そこで両部会では、このような事情に鑑みて、英語 B 及び未修外国語 II のセットとしての必修

化を7月9日第4回授業編成専門委員会で提案し、各学部での意見を聴取してきてもらうよう依頼した。これにより英語教育及び未修外国語教育の充実化が図れ、開講時期をすべて一年前期からに統一でき、上に述べた問題も同時に解決できると考えたからである。

その結果を7月23日第4回教養教育推進センター執行委員会で審議した結果、おおよそ以下のような意見が提出された。(学部名は省略)

- ・単位数を今以上増加させるのは困難。
  - ・英語教育の充実を優先して欲しい。
  - ・英語Bを必修化するのであれば、ぜひとも専門の教員に委ねたい。(現在は専門外の学部の教員が多くを担当している)
  - ・賛成意見も多かったが、第一段階として英語Bに加え、未修Ⅱも履修するよう、履修指導してみてはどうか。その上でⅡの必修化を考えてみたらどうか。
- など。

この問題は時間割との関係もあり(非常勤コマ数の増加については、4コマ程度)、なかなかすぐに解決のつくものではないが、いずれにせよ、既修外国語部会とともに、未修外国語部会は外国語教育がこのままの状態でのよいとは考えておらず、その問題解決のためのたたき台としてこのような提案を行ない、今後も議論を継続していく予定である。

## 8. 日本語・日本事情系

プレゼンター 留学生教育部会主任 森田晃一 教授

### 平成19年度教養教育推進センター 第1回FD研究会 日本語・日本事情系：現状と問題点

#### 1. 留学生教育

全学共通教育の中に、学部留学生を対象として、日本語・日本事情に関する科目を設置している（「外国人留学生学部入学者状況」）。

これらの科目は、たんに日本語の運用能力の向上をめざすのではなく、日本文化に関する幅広い教養を学びながら、多文化共生に関する考察を深めることを狙いとしている。

#### 2. 現状

日本語・日本事情系の開講コマ数（2004～07年度）

	04前	04後	05前	05後	06前	06後	07前	07後
日本語系	4	4	3	2	2	1	2	1
日本事情系	2	2	3	3	2	3	2	3
	6	6	6	5	4	4	4	4

#### 日本語科目受講者数

04前	C1	6	32
	C3	0	
	D2	16	
	D3	11	
04後	C2	6	15
	C4	2	
	D1	0	
	D4	7	
05前	C3	3	16
	D1	9	
	D3	4	
05後	C4	2	6
	D1	4	
06前	D2	12	18
	D3	6	
06後	D1	6	6
07前	D2	5	15
	D3	10	

#### 日本事情科目受講者数

04前	A1	12	22
	B1	10	
04後	A2	12	16
	B1	4	
05前	A1	6	14
	B2	3	
	C1	5 (50)	
05後	A2	8	30
	C2	14 (30)	
	多文化	8 (30)	
06前	A1	3	16
	C1	13 (33)	
06後	A2	1	23
	C2	12 (31)	
	多文化	10 (43)	
07前	A1	4	12
	C1	8 (31)	

括弧内は日本人学生数

2004年度までは、前期・後期とも日本語系の開講科目数が4、日本事情系の開講科目数が2であったが、日本事情系と比較して日本語系の受講生が少ないため、2005年度前期に日本語系を1科目減らして3、日本事情系を1科目増やして3とし、後期にはさらに日本語系を1科

目減らして2、日本事情系を3とし、2006年度からは上記の開講コマ数へと変更した。

また、日本事情系3科目（「日本事情 A1」「日本事情 A2」「クロスカルチャー・コミュニケーション」、前期1・後期2）を、留学生と日本人学生がともに学ぶ、異文化を理解するための科目と位置づけ、日本人学生用にも「異文化論 I・II」「多文化間関係論」として提供、留学生と日本人学生との混合クラスとした。

学部留学生のために開講されている日本語・日本事情系科目ではあるが、短期交換留学生や日本語日本文化研修留学生の受講もあり、受講者数は次の通りとなっている。

### 3. 問題点と解決策

①外国人留学生が日本の大学に入る場合、原則として、日本語能力試験1級に合格することが目安とされているが、実際には、留学生の日本語運用能力が一律でないため、教授する日本語・内容ともに、どこにレベルを設定するかが難しいこと

→留学生センターが開講している日本語科目を履修できるようにする。現在、留学生センターでは、初級・初中級・中級・中上級までの幅広いレベルの日本語クラスを提供している。しかし、受講対象としているのは、留学生センター所属の正規生および大学院進学希望の研究生であり、学部留学生に関しては単位の問題もあり、受け入れる体制になっていない。中上級レベル日本語運用クラス（口頭表現・文章表現）については、学部留学生にも有益な内容が提供されているので、留学生センターの日本語科目を履修できるようにすることが必要である。もちろん、その場合には、留学生センターの日本語科目のレベル・内容を、より全学共通教育の日本語科目と密接に連携しうるよう、見直しもあわせて留学生センターに要請しなければならない。

②留学生と日本人学生との混合クラス（3クラス）では、効果的なクラスとするため日本人学生の数を一定にしているが（30名あるいは40名）、日本人学生の履修希望が多く、受講生数を制限せざるを得ないこと

→岐阜大学の「国際化」の一方法として、留学生と日本人学生の混合クラスを増やす必要がある。現在、日本事情系5コマの内、3コマを混合クラスとして展開しているが、他の2コマは留学生のみのクラスである。この2コマの内容は、日本近代史であり、アジアからの留学生も多いことから、もしこれが混合クラスになれば、留学生にとっても日本人学生にとっても有益であろう（ともすると一面的な見方をしがちなアジアの留学生に対し、この問題に関して冷静な見方のできる欧米の留学生が加わると、学習効果はさらに高くなるものと思われるが……）。

外国人留學生学部入学者状況(平成11～19年度)

学部・ 国名 年度	教育学部				地域科学部				医学部				工学部				農学部				応用生物科学部				計														
	中 国	マ レ シ ア	韓 国	イ ン ド ネ シ ア	小 計	中 国	マ レ シ ア	韓 国	イ ン ド ネ シ ア	小 計	中 国	マ レ シ ア	韓 国	イ ン ド ネ シ ア	小 計	中 国	マ レ シ ア	韓 国	イ ン ド ネ シ ア	小 計	中 国	マ レ シ ア	韓 国	イ ン ド ネ シ ア	小 計	中 国	マ レ シ ア	韓 国	イ ン ド ネ シ ア	小 計	中 国	マ レ シ ア	韓 国	イ ン ド ネ シ ア					
11	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	1	2	0	0	3	0	0	0	0	0	0	6	2	0	0	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
12	0	0	0	0	3	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	3	2	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
13	1	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	2	4	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
14	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	2	5	0	9	1	0	0	0	0	4	2	5	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
15	0	0	0	0	2	0	0	1	0	1	5	3	5	0	13	0	0	0	0	0	2	0	0	0	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
16	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	4	0	0	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
17	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3	0	3	0	0	11	0	0	0	0	0	12	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
18	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2	1	0	0	4	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19	0	0	0	0	3	0	0	0	0	1	4	4	0	1	9	0	0	0	0	0	2	0	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	1	0	0	0	18	0	0	0	0	27	29	17	1	74	1	0	0	0	1	1	49	29	18	1	97	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

注:受入国は上記4ヶ国のみ。黄色着色欄は、女子を内数で示す。



# 第2日目【9月28日(金)】

## 【個別テーマ討論】

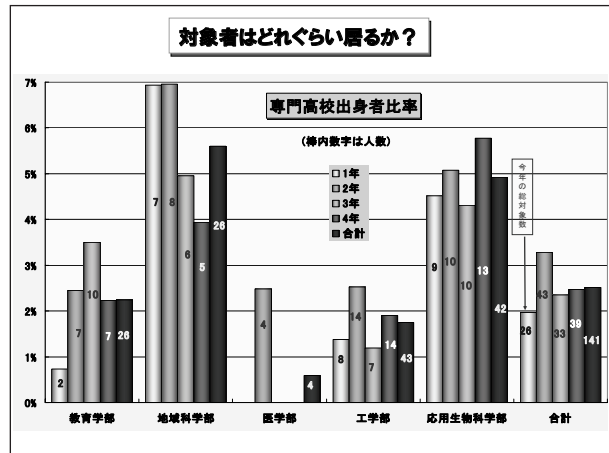
### 「リメディアル教育のあり方ー学部教育とリメディアルー」

提題者 自然科学部会主任 若井和憲 教授

教養教育推進センター FD研究会 2007. 9. 28

### 理系科目の リメディアル教育について

授業編成委員会・自然科学系部会  
若井和憲



#### 岐阜大学における理系教養科目リメディアル教育の背景

1995年	応用生物科学部で、入学前補習授業を開始(学年自由、現在は専門学校)
2004年度	上記を受けて、全学的にリメディアル授業実施について検討開始
2005年度	2006年度より数学、物理、生物を普通科目同様2単位で導入決定
2006年度 前学期	初年度 受講者少数
11月	自然科学系部会で、とくに受講者数が少ないことについて今後の対応を検討。普通高校の未履修者が希望者の受け入れの可否? 1年目から方針転換はどうか? 受講者の層が広がりすぎて授業形態が崩れることへの懸念、などが出て、とりあえず、07年度は学生への説明を徹底することにした。
12月1日	教養教育センターの外部評価で、期待意見があった
12月6日	教養教育推進センターFD研修会の話題の一つ、普通高校出身者についても、対応したらどうかという意見が学長などからあった
2007年度 4月	新入生ガイダンスで、専門高校の受講者への浸透を深めるべく、説明強化
前学期	受講者数、上記対策にもかかわらず、あいかわらず少数にとどまる
6月	執行委員会において、9月のFD研究会で2日目の目玉議題をリメディアル教育理系科目を対象とすることが提案される
7月	それを受けて、自然科学系授業編成部会を開催、対応を協議、アンケート実施で、学生の意見を聞く必要ありとなる
7月	専門高校出身者1-4年生に出身高校別年別にアンケート実施、同じく普通高校理数科出身生1,2年生対象に、アンケート実施
8月	H19年度岐阜大と高校との連絡懇談会・第二部会で、ある種の評価の感触
9月	本日の話題提供に至る

#### 専門高校出身者向けアンケート内容

実施方法: 紙

教養教育推進センターでは昨年度から、専門高校出身の学生対象にリメディアル教育科目を開講しています。それらの学生諸君は専門に力を入れた教育を受けてきたため、一般教養的な科目を十分受講できなかったと考え、たとえば生物系の学科出身者には、「一般教養として「物理」や「数学」、工業系出身者には、「生物」の基礎を充実してもらいたい」とを期待し、理系のリメディアル教育科目として「数学」「物理」「生物」を各一科目開講、また数学については学習相談室を設けました。今後、これらの科目をよりよくするため、以下にご協力・ご意見をいただければ幸いです。なお、ご意見になるべく沿うよう、検討・改革してゆくつもりですが、すぐに反映できない場合もありますので、ご了承ください。

設問1. 卒業した高校の種類を教えてください(該当項目に○をつけてください)。  
 設問2. その高校では、大学受験や進学のために、特別授業が組まれていましたか?  
 ・どのような科目を何単位履修しましたか(単位の出ない補習でしたか)  
 ・授業を受けた科目について、受験・進学対策は普通高校並みになったと思いませんか?  
 ・組まれていなかった場合、受験・進学対策はどのように行いましたか?  
 設問3. 自然科学系・リメディアル科目のうち、どれかを受講していますか? ← 1, 2年生用上記科目が1, 2年次に開講されていたら、どれかを受講しましたか? ← 3, 4年生用  
 微積分・最初の一步 物理学入門 現代生物学の基礎  
 ・受講していない(しない)場合、その理由を教えてください。  
 設問4. 英語は特別なリメディアル科目を組む代わりに、勉強方法などの相談室を設けていますが、このことについて以下のいずれの意見か、①②③の番号に○を付けてください  
 ① 普通高校出身者と一緒に受講してみて、特段違いを感じず、特別クラスを設ける必要も無い  
 ② 英語はやはり授業数が普通高校より少ないと実感、特別クラス編成を望む  
 ③ そのほか( )

#### 岐阜大学の現状

自然科学系科目のうち「数学」「物理」「生物」を開講、単位授与(2006年前学期から)

分野	内容	対象
自然科学概論	総合的視点に立ち自然科学の概要を説く科目	全学部生
自然科学入門	数学以下基礎的5科目の入門科目	文系学生
自然科学基礎	学際的・融合的自然科学基礎科目	理系学生
リメディアル教育	入試の多様化に配慮した補習教育的科目	専門高校出身者

受講者数	'06年	'07年
数学:「微積分・最初の一步」・月5限	8人	5人
物理:「物理学入門」・火1限	1人	2人
生物:「現代生物学の基礎」・月1限	3人	14人
延べ受講者数	12人	21人
対象者数	43人	26人

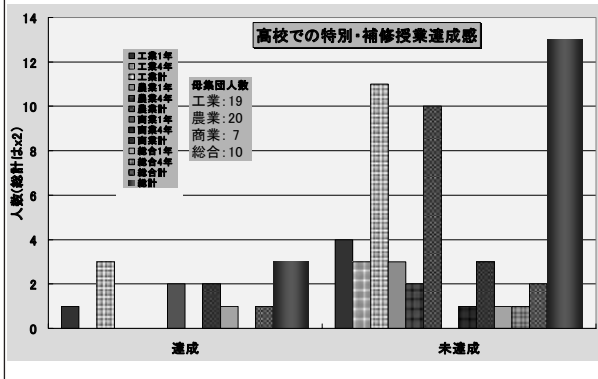
#### 普通高校出身者向けアンケート内容

実施方法: AIMSによる

教養教育推進センターでは昨年度から、専門高校出身の学生対象にリメディアル教育科目を開講しています。ところが、普通高校出身のなかにも、「自分は高校では物理を受けていないけれど入学した学科はそれが必要なので、単位が取れなくても良いから、是非リメディアル科目の物理学入門を受けたらいい」などの希望者が現れました。それで、来年度以降の授業編成を検討するため、そういう希望者の数や事情を知らねばならないことになりましたので、ご協力いただけますよう、お願いいたします。

設問1. 所属する学科・講座・課程を選択してください。  
 設問2. リメディアル教育科目を受講したいと思いませんか?  
 はいと答えた方は設問3、いいえの方は設問7に進んでください。  
 設問3. リメディアル教育科目を受講したいと思った理由を教えてください。  
 設問4. 設問3でその他と答えた方は、理由を具体的にお願いします。  
 設問5. リメディアル教育科目として以下の開講科目中、どんな科目を受講したかったですか?  
 (複数可) その他にチェックした人を除いて設問8に進んでください。  
 設問6. 6でその他と答えた方は、具体的な科目についてお聞かせください。回答後は設問8に進んでください。  
 設問7. 高校で学んで来た内容をさらに深く学びたいと思って入学した人は、リメディアル教育科目の履修の必要性を感じないのが普通と思いますが、もしこの科目について意見をお持ちでしたら、自由に記述してください。

### 入学前授業・補修についての達成感は？



### 講義担当者の声

- 1) 1年目：一般的な講義の方法をとった。しかし、効果という点ではいまひとつだった。2年目：徹底した演習主義にした。計算の練習不足による理解不足が学力低下の原因との背景から。3年目に向けて：①基本的な概念と問題をまず説明。② やさしい問題で演習、続いていくつかの問題演習実施。③ つまずいているところをマンツーマンで指導する。④ 同様の演習を続けて知識と計算力の強化をはかる。⑤ レポートを提出を義務付ける。
- 2) 企画者(センター)、講師、受講者の間で講義の意味に関するずれ合いがある。 正を

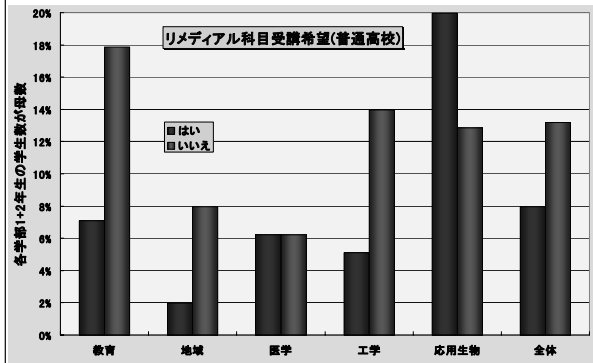
受講者がごく少数で、欠席居眠りがあると授業にならない。数を増やす努力を期待する。前年度は、以下の各学部の部会委員の意見を参考にした  
 教育：できれば高校の物理。少しレベルアップした内容を含んでも良い。  
 地域：担当教員の判断にまかせる。  
 応生：高校レベルから自然科学の基礎が理解できる程度。学部の基礎科目との関連は薄い。  
 看護：高校物理の初歩と多様な要望への対応の可能性懸念、だが実際の受講者は一人で、結果として問題無かった

学生の意識も高くそれ自体に不満は無い  
 農業高校出身者は生物学系の科目は山ほどとっていたはず  
 知識量は「通常の普通高生」と同様に、専門教育を学ぶには不十分  
 応用生物科学部の普通高卒業生もきわめて理解が不十分  
 希望者には門戸を広げる。(応用生物科学部は専門高校のみでもかまわない)  
 専門高校に限るなら、むしろ個別科目に入れた方が効果的

### 受講しなかったのはなぜですか？

- 工業系**
- ・受講していない科目は、必修講義とバッティング(1年)
  - ・微積と物理は、受験対策として勉強した。受講の必要無しと考えた。生物は2年で受講予定(1年)
  - ・自己都合でその時間受講できず、自習した(2年)
  - ・一回見学に行ったら、1年時に習った授業で補えそうだった(2年)
  - ・工学系総合学科なので、普通科科目も選択履修できたため、必要科目を履修していた(2年)
- 農業系**
- ・全ての科目が必修科目と重複していたから(1年)
  - ・おもしろそうじゃなかった(1年)
  - ・気づかなかった(2年)
  - ・ほかの講義で十分単位がとれたから(2年)
- 総合系**
- ・最初の授業の説明を聞きに行ったら、いきなり授業のようなものが始まり、その内容があまりにわからなかったので、「基礎」なのにこんなに難しいのは無理だと思いました。その授業を探った友達も、今とても苦しんでいるので、取らなくて良かったと思います(1年)。
  - ・必要無いと思ったから(1年)
  - ・理系出身ではないので、これらの科目は難しいと思ったから(2年)
  - ・どれも高校で習っていないから(2年)
  - ・理数系が苦手だから(2年)
  - ・高校でやってなくてついていけないと思った(2年)

### リメディアル科目が有るなら受けてみたいですか？

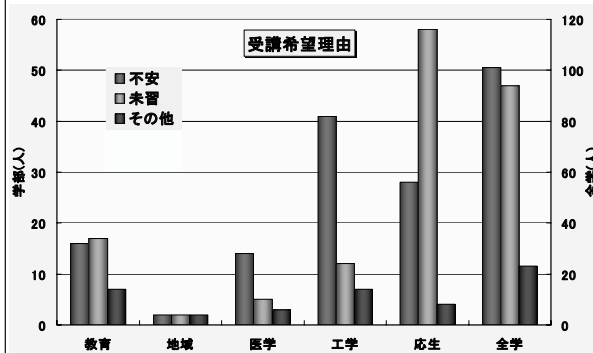


- 総合系**
- ・受講しなくてもわかる(1年)
  - ・それらの分野に進もうとは思っていないから(1年)
  - ・難しそうだし、習っていない科目だから(2年)
  - ・興味がなかった(2年)

### 受講しようと思わないのはどうしてですか？

- 工業系**
- ・自分ではわからないと思う(3年)
  - ・受講すると良いとは思いますが、実際受講するかどうかわからない(3年)
  - ・でもやっぱりたぶん自分には無理と思う(3年)
  - ・高校ではどの学科も物理・化学のみだったから(3年)
  - ・微積は受講前不安があったが、今振り返ってみると1,2年の講義で十分理解できたから(4年)
  - ・数学は理科系の科目より得意だった(4年)
- 農業系**
- ・生物は普通高校並みのレベルだから(3年)
- 総合系**
- ・数学や英語もやっていただけるとありがたい(4年)

### 普通高校出身なのになぜリメディアル科目を受講希望しますか？



平成19年度 FD研究会  
リメディアル教育の在り方

## 工業高校の現状 と 大学教育に望むこと



2007. 9. 28

## 工業高校の現状

＜高校の抱える問題点＞

- ・少子化による統廃合の影響  
(定員割れ、多様化→レベルダウン)
- ・ゆとり教育による影響  
(授業内容の精選→基礎基本のみ)
- ・家庭・社会の教育力による影響  
(放任主義→自己責任?→無責任?)

## 工業高校の一般的な学習内容 ＜必修科目とその他の科目＞

教科	必修科目	選択科目
国語(8)	国語総合(4)	国語表現Ⅰ(2) 現代文(2)
地歴(4)	世界史A(2)、日本史A(2)	地理A(2)
公民(2)	現代社会(2)	政治経済(2)
保体(9)	体育(7)、保健(2)	
芸術(2)	美術(2)	
家庭(2)	家庭基礎(2)	

## 工業高校の一般的な学習内容 ＜必修科目とその他の科目＞

教科	必修科目	選択科目
数学(6)	数学Ⅰ(3)	数学Ⅱ(3)、数学Ⅲ(3) 数学A(2)、数学B(2)
理科(5)	理科総合A(2) 物理Ⅰ(3)	物理Ⅱ(3) 化学Ⅰ(3)
外国語(6)	英語Ⅰ(3)	オーラルコミュニケーションⅠ(3) 英語Ⅱ(4)
情報(2)	情報技術基礎(2)で代替	

## 工業高校の一般的な学習内容 何が不足しているか？

- ☆「数学Ⅲ」 → ほとんど履修していない
- ☆「物理Ⅱ」 → ほとんど履修していない
- ☆「化学Ⅰ」 → ほとんど履修していない
- ☆「英語Ⅱ」 → 一部選択履修している

◎約半分専門教科を履修するため普通教科が不足！  
◎専門高校も生き残りをかけ「専門科目を増やしている。」  
(高度熟練技術者・技能者を目指して指導、他)

## 大学教育に望むこと リメディアル教育の推進！

- ☆工業高校卒業生は  
大学のリメディアル教育を受講する。  
(微・積分、物理学等必修！)  
在学中は数学Ⅲの補習を受講する。  
(数学Ⅲを履修する。)

※今後、高大連携の会議を持ち、  
お互いにカリキュラムを考える。

## 2008年 大学の推薦入試 (専門・総合学科高校対象)

☆国・公立大学 約70大学  
(センター試験免除)

☆私立大学 約90大学

## 大学教育はどうあるべきか



## 大学の卒業厳格化

中教審小委員会より

- 大学が目指す学習成果や学位授与の方針を明確化
- 客観的な成績評価の基準を共有化し、評価を厳格化
- 高校の調査書を積極的に活用(入学者選抜の見直し)


## 大学教育に望むこと

- 地元(岐阜県)の国立大学として、地元の学生を育て、地元へ貢献してほしい。
- 「専門高校から岐阜大学に入学できる！」夢と希望を持たせてほしい。(指定校推薦、一般推薦等)
- AO入試(資格や特技等)の実施。  
※推薦等入試合格者への課題(宿題)

## 工業高校の対策

- 4大進学者対象の補習授業の実施
- 大学側からの情報提供による指導
- 校外での自主学習強化(家庭学習、進学塾等)
- その他(創造性、コミュニケーション能力の育成)

## 高大連携で地元を活性化！

- 子ども達の夢が叶う教育！ 
- 地元大学・企業から愛される高校に！  
※先生方のご意見をお聞かせください。

## 平成19年度第1回岐阜大学教養教育推進センターFD研究会

岐阜農林高校の進路指導を担当しております、野原と申します。

今日は若井先生の方から、こういう研究会をやられるという事で顔を出すようにという連絡で来ましたので、大垣工業高校の神谷先生のような資料は用意をして来ておりません。

先程の若井先生のプレゼンから少し拝見させていただきまして、工業高校の神谷先生と同じですが、こういった形で専門高校の生徒に対して色々ご配慮いただいていることを本当に感謝申し上げます。

農林高校ですので、どちらかと言いますと応用生物科学部との関係が深いようですが、他学部の方へもここ十年ぐらいですと教育・地域・工学部の夜間主へお世話になっております。やはり、本校の生徒にとって岐阜大学というのは一つの大きな目標でもございますし、中学校にこのように大学にも進学していますと言えます。中学生が農林へ入学したらどのような進路があるのか、進学出来るのだろうかという質問に対して、農林でも進学が多く、岐阜大学へも入学出来ると答えておりますが、そういう所を見て本校を受けに来る生徒もいます。それは他の専門高校も同じかと思えます。

中学校から高校へ上がる場合の進路指導というものは、以前はいわゆる点数で輪切りして一律に割っていくというやり方でしたが、今は変わってきておりまして自分が将来やりたい分野に進むということを進路指導しておられます。たとえば本校の場合ですけれども、普通科に進学する位の点数を取る生徒も入って来ますし、低い生徒もおります。かなり幅があります。普通教科の学力を見ていますとかなりばらつきがあるという感じがします。普通高校の生徒は5教科の成績がそろっておりますけれども専門高校へ来る生徒というのはかなりばらつきがあるということと、やはり英語とか数学が特に弱いことを感じております。

以前ある国公立大学（岐阜大学ではありませんが）へ進んだ卒業生が毎週のように本校へ来て数学がわからないということで、数学担当の先生から教えてもらっておりました。大学はかなりレベルが高いし難しいので、それまでは自分で勉強するものだと思っておりましたが、たとえば私立大学などではいわゆるリメディアルに力を入れていることを一つの売りにして、高校側へ生徒を送って下さいと言う大学もいくつか出てきました。大学の中で生徒をいかに育てるかということに（岐阜大学も本日のような形で行なわれておりますが、）大学側も力を入れてきていると感じるようになりました。

本校の場合は国公立大学へ進学する生徒は、ほとんど大学入試センター試験を課さない推薦Iで入学をしますが、センター試験を受けることを推薦の条件にしています。つまり、国公立大学へ進学する者は、必ず勉強をしてセンター試験を受けるということです。実際には入学が決まっている状態でのセンター試験ですので、しっかり勉強しているとは言いがたいですが、一応センター試験を受けさせるということをやらせています。

応用生物科学部からは、推薦入学が決まりますと普通科高校が使っている教科書を渡していただいて生徒が勉強してくるようという指示がありますので、生徒が持って来て質問したり解らないところを聞いたりしたことに教師が応じているといったところです。

ですから、センター試験を受ける準備をする以外は、あまり纏まった大学進学のための準備教育ができていない現実があります。やはり、どうしても大学に入ってからいろいろご指導いただかないといけない点が多いのかなというようにも思っております。先程からいろいろお話を聞いておりますと高校のカリキュラムの問題もあるのかなと思っております。

専門高校はどちらかというと今までは就職が中心ということでしたが、本校ですと大体6割位が進学です。商業高校で約7割（大垣工業高校では3から4割）が進学希望です。

以前に比べると随分と進学の割合が増えてきていますので、進学する生徒は普通科目をかなりたくさん取れるようなカリキュラムになっています。勿論、専門高校の制限がありますが、制限いっぱいの中である程度大学へ進んでからの基礎が身に付けられるようなカリキュラムにしていく必要があることを感じました。

岐阜大学のリメディアル教育につきましては、本校の卒業生から間接的に聞いた話ですので実態を把握しているわけではありませんが、リメディアルの科目を取ろうと思ったら必修の授業や教養セミナーと当たっていて受けられなかったと聞いておりますので、時間割上のご配慮がいただければと思います。

物理学入門の履修条件を拝見しますと「高校物理Ⅰ・Ⅱの教科書を持参する。三角関数、ベクトル、微分・積分の基礎的な学力を必要とする。」とありますが、本校のような場合物理はどうしても選択の関係で履修出来ていない現状があります。進学する生徒は数学も微積の初歩的なことまでは行ないませんが、なかなかしっかり定着しているとは言い辛いので、ご配慮いただけるとありがたいと思っております。こういった形で今、岐阜大学がやろうとされていることを私共も把握して高校側で何が出来るのかを考えることが必要だと思います。大学へ送れば後はお任せみたいな形ではいけないのかなということを今日のお話を聞いて感じました。今後とも、うまく高校と大学とのつながりが出来れば生徒にとっても一番いいことではないかと思いました。

本日はどうもありがとうございました。

## 平成 19 年度

### 第 1 回教養教育推進センター FD 研究会アンケート集計結果

Q 1. 今回ご参加いただきました研究会全体の内容等について、どのように感じましたか。  
感想等をご自由にお書き下さい。

- ・全体を通して「岐大生のレベルは低い（かつてに比べて）のだから」という意識が底に流れていて、事態の深刻さを感じた。
- ・高等教育機関としては存在し続けられない事に暗い気分になる一方、現実に対応して手取り足取りの親切的な大学に転換する事に明るい未来があるのかとも思った。
- ・今回の FD をわざわざ泊まり込みの合宿にした意味が今ひとつあきらかでないように思いました。  
集まって話すのなら大学で話した方が参加しやすいと思うのだが・・・
- ・自由討論の時間が短すぎた。（幹部の方々の話ばかりが長い）
- ・大学の中でやった方がもっと議論出来ると思う。（今回は泊まり込み FD の必要はなかった）
- ・何か結論を出す必要がある時だけ、泊まり込みの FD をやって欲しい。
- ・他学部、他分野の状況がある程度分かって、大変参考になった。
- ・無理にテーマを設定しなくても、それぞれの学部、部会での現状を率直に確認しあうだけでも効果的なのではないかと思う。（きちんとしたでデータと生の声ができる事が必須だが・・・）
- ・大垣工業高校の先生のお話も参考になった。
- ・学部や科目ごとの実情を知ることが出来て良かった。
- ・システムの維持を前提とした議論に終わっているように感じた。
- ・多くの仕事を抱える教学関係者、全共関係者を遠方に泊まりがけで拘束する必要があるのだろうか？他大学でも行われていると聞いたが、実質重視にしたほうがよい。往復 2 時間を学生との対話に使う方が意味があるのではないか。
- ・学部での学習についての学生をつまづきの問題に共通教育のあり方、今後の指針となりそうな情報が得られ、有意義であった。
- ・能力の低下、質の低下とセンター長がおっしゃったが、「能力」、「質」とは何を指しておられるのかが問題であると思う。「入試」の成績が良かったらそれでよいという「教育」が現在の最大の問題なのではないか。「教養ある人」を育てて来なかった小～高までの教育そのものが例えば医師としての失格者を生み出してきたのではないか。この入試地獄の頂点に立つ「学力」を持つものを「まともな医師」に育てられる資質を持った者として選んでいる今の「システム」の敗北であろう。まず「人」を育てる教育が日本にないのであると思う。「人」を育てる教育をせずして名職人を大学院で育てるという方法をとっても全く意味がないであろう。大学が大学院にシフトしただけでしょう。大学入試が小～高までの教育を壊していると考えられる。  
大学入試ではなく高校の卒業設定を国が少なくとも半分は行うべきであろう。（例えばカナダ）
- ・大学としての考え方がまとまっていないので、結局多くの考え方があるということが紹介されただけにすぎなかった。ただしどのような状況になっているのかはよく分かりま

した。

- ・まず、入試科目について、学生を集めるという観点とある程度のレベルを持った学生を望むという点の二点の間で、どこに軸足を置くか決めるべき。リメディアルは専門基礎に関わるものとする。入学後の学生の質の向上をどう図るかである。入学時のある程度の輪切による選別に従い、学生の意向を細かく聞きながら入学直後のリメディアル(学部の専門科目を受け持つ教員が担当すべき)、単位を落とした学生へのリメディアル(学部の専門科目を受け持つ教員が担当すべき)を組み合わせるべき。それには専門以外担当したことのない教員の意識改革も必要では。
- ・元教養部教員の40%が退職したとの現状に改めて気づかされた。外国語科目は1コマ1単位とし、既修・未修合わせて8単位ほどを必修にしてもよいと思った。
- ・いろいろな先生方と話し合えたのは良かったが、将来の教養教育について不安が残った。初日のスケジュールはやや過密ではないか？2日目はゆっくりできた。
- ・教養教育という言葉のとらえ方が個人によって大きく異なっている事が分かった。初年度生教育とするのか、あるいは真の教養教育とするのか、岐阜大学としての目標を定めることが必要かもしれない。
- ・2日間に渡り、充実した討論であり、有意義であったと思います。
- ・必ずしも合宿でなくても良かったのではないのでしょうか。
- ・工学部より参加しましたが、大変有意義でした。しかし、岐阜大学の未来を担う若い教員の参加が少なすぎる。ある程度強制的に参加させては？
- ・議論が実はかみ合っていないのでは？と思う場面があった。議論の前提をもっと設定すべきだ。
- ・有意義でした。
- ・発表と議論の時間比率を変えて、もう少し議論の時間を増やした方がよい。2日目は8時からでも良かった。時間をゆったり取りすぎ。
- ・くさび型教育との兼ね合いで、モチベーションの高い学生にはそれなりの内容の講義をする必要があると思う。講義内容の難度を体系づけて、学生が選択しやすいようにしてはどうかと思う。  
(例えば専門など一般性のランクなど)
- ・現状と問題点を共通認識する意味で有効であったと思う。しかし、整理、分析が不十分で今後そういう作業が必要である。
- ・教養教育改善のためには、センターのリーダーシップが必要であり、学部の意見や希望を聞くだけでは改善は進まないと思う。  
改善策には様々あって、合意を待って何もしないよりは、何か行動する方がよい。
- ・忌憚ない意見が聞けて良かったが、やはり大学でやってほしかったし、やるべきだったと思う。内容が良かっただけに、より多くの人々に聞いてもらう必要があったのでは？
- ・最初の中村センター長のご講演にあった「教員は毎年4%入れ替わる。この10年ですでに元教養部の先生は約半減、10年後にはほぼ皆無」という表現は大変心に響いたし、また全学共通教育が直面している危機的状況を改めて痛感した。この単純明快な一言を大学の全教員に聞かせるだけで、教養教育を自分の問題として考える機運は大幅に高まるのではないかと思った。
- ・講演が多少盛りだくさん過ぎたような気もするし、また学長との懇談会は残念ながら自由に発言できる雰囲気でもなかったが、夜は部屋でもまた会場でも真夜中過ぎまでいろいろな方々のお話を聞くことができ、全般的には大変勉強になるFDだった。今回ここで学んだ現状認識や問題意識をいかに今後の問題解決に結び付けて行けるかが、自分も含め参加者全員にとっての課題である。



## Q2. 第1日目の基調討論についてどのように感じましたか。

第1部「学部を考える教養教育－基本的な考え方と具体的な体制の問題－」について、感想等をご自由にお書き下さい。

- ・副題の「具体的な体制の問題」があまり浮かび上がって来なかったように感じた。討論のトピックにもなったが「教養教育」の定義付けが必要なのだと思う。
- ・学内でやるべきプレゼンだったと思う。データは貴重でした。泊まり込みでやるのは、それを元に自由討論主体で。
- ・学生の視点、授業担当者の視点が不足しているように感じた。
- ・アンケート結果を見ると、各教員の「教養はかくあるべき」という理念は確固としており、共通の結論に至るのは難しいと感じた。大まかな達成目標を示して各教員に任せてよいのではないかと？  
学生の学力差が問題視されているが、学生に合わせるよりもモチベーションを上げることが重要。  
1年生は学部を選んで受験したのだから専門へのモチベーションが4年間で最も高いはず。それを生かして専門につながる基礎を教えると良いと思う。
- ・学部の教育の為の教養教育なのか、人間形成のためのそれなのかをもう少しあきらかにすること。  
そして前者の場合、学部に求められるものの差異と全学共通とするもののギャップをどのようにしたらいいのか、など考えさせられました。私が全学共通ですることの方向を模索したい。
- ・各学部のお話を聞いていて、教育の目的は何かを改めて思った。私は「人」を作る事が最大の目的であると思っています。「人」を作る素地ある教育が小～高で行われない所で大学教育は成り立たない。  
現在の入試下での「学力」による選別で入学した学生に専門職業人（研究者も含めて）としての教育を行うと、例えば「ガン」を治したけれど患者が死んだという事が起こり兼ねないのではないだろうか？  
それを「人」を育てる教育をわずか1年単位の「教養教育」に負わせて、実効があがると思いますか？  
ローカル線の名鉄支線に乗るとカバンを座席に置いて（2人分の席を専有している）試験勉強を必死にやっている高校生がたくさんいる。人が乗り込んできて素知らぬ顔である。このような「人」がよい成績をとって大学に入ってきて各学部の目指す職業人、医師、教師、研究者、官吏をつくったとしても、その「人」たちの中に「望ましい真の職人」がどれだけ育つと考えられるのでしょうか。すべての責任が大学教育に課せられている事実をどのように考えられますでしょうか？もはや大学教育、否教養教育で小手先の改善できる問題ではないと思います。政府同様、日本の教育全体が絶望的であります。  
大学に入ることが目的の「教育」で育った学生は「望ましい人」になかなかないが故に大学での勉学の意欲すら失っているのが現状ではないでしょうか？高校での基礎学力も不足になるのは当然。
- ・教養教育の重要性は認めながら、実状としては教員は専門教育を重複していることが良く分かった。
- ・学部の様子がある程度分かったような気がする。
- ・医学部のアンケート結果は説得力があり、他にもアンケートの報告があったが、調査の

母集団が小さく結果が明確でなかったように思われた。

- ・学部によって教養教育に求められるものが違っているように思われる。一方、教員側にも問題がある。  
全ての教員に基礎から専門までの幅広い教育を求めるのは不可能である。教員はオールマイティではない。やはり、教養教育を担当出来る教員の集団が必要ではなからうか？
- ・各学部の教員の意見分布が分かり参考となりました。
- ・サービスを受けることにより、どう貢献するかを議論したかったように思います。
- ・各学部での考え方を知る機会がなかったのが、よく理解できた。しかし、人員削減という避けがたい事実を無視した意見が多い？
- ・意見の寄せ集めである。
- ・大学としての方針がまだ定まっていな気がした。今後、十分な議論が必要だと思う。
- ・責任組織センターを作った方がよいという意見が多いが、その分のポストをどうするのか考えて言っているのだろうか疑問。  
医学部のアンケートに「ただし医学部のポストは削るな」と書いてあったのには驚いた。
- ・教養教育に対して例えば60歳を超えたら、基本的に全員が参加する（年間1,000万円以上の研究費を獲得した教員は除く）ぐらいの思い切った制度を取り、少人数で教育するなどの改革が必要かもしれません。
- ・アンケートの結果は興味深いものだった。医、工学部では具体的な指摘が多くあり、よかったがやはり、ていねいに整理し、方針化していかないとせつかくの指摘も無駄になるだろう。
- ・各学部の（すべての人ではないが）意見が聞かれて良かったと同時に、1つの見解に集約することの困難さを改めて感じた。
- ・工学部竹内先生が実施されたアンケートの集計結果が、非常に多くの教員の生の声が紹介されていて、大変興味深くまた参考になった。工学部1学部限定しても、教員の考え方のスペクトルの広さが窺え、これらの教員をまとめて全学的に一つの方向に動かして行こうとした時に遭遇するであろう抵抗や反発の可能性を垣間見る気もした。

## 第2部「授業分野の現状と問題点」について、感想等をご自由にお書き下さい。

- ・スポーツ健康分野、留学生教育は少しカヤの外と感じられました。だからといってそれらを廃除するのは、それはそれで問題になりそうですが・・・
- ・データは良かった。参考になりました。（総合科目で）1単位授業はもう少し減らしても良い。実技・演習・討論主体の授業だけ1単位にした方が良いかもしれない。
- ・体育・スポーツ部会や留学生教育科目、外国語部会 etc. の実情が分かって良かった。
- ・外国語が非常勤に多くを頼っている事。「講義」ではなく「授業」としての知識を伝える役割を考えると教員の独自性よりも教科書があって一定のレベルの知識が得られればよいので、「岐阜大学」として独立完結した体制にこだわる必要はないと思う。SCSで大学間の単位交換が出来れば、人員不足の問題も解決されるのではないかな？教員に義務づけや強制をしなければならぬ状況は教員にとっても教養教育の意味が感じられないからではないか？
- ・文系の報告の中に大学だけで解決出来る問題ではなく高校以下の教育に・・・という発言がありました。まさにそう思いました。
- ・各系のかかえている問題点や事情は分かりましたが、解決の方向が見えてきません。一般教員には手にあまる内容でした。
- ・未修外国語が負担増になっても2コマを必死にしたいとの意向に感激した。

- ・いろいろな分野の現状が理解出来たが（得に体育施設の写真は説得力があり）、だからといって今後どうすればよいのか方針（プラン）が出てこなかったのが残念。
- ・外国語の教育に多いな問題点があることが分かった。特に担当教員の不足は単位を増やす時に足かせになると考えられる。
- ・各分野の抱える問題点が提示され、改めてその多さ、多様さに驚いた。
- ・担当している先生方の努力に頭が下がる思いです。
- ・有益な疑問があった。また情報も得られた。
- ・どの部会も熱心であることに感銘した。今後、語学の充実が望まれる。
- ・総合科目の位置づけや意義を今一度、センター、担当教員、学生間で確認すべきではないか。各学問分野の学際領域の総合、文理融合は、各学問分野の基礎が出来ていなければ難しいことを認識してほしい。
- ・総合科目を担当していますが、ほぼ全ての学部の学生が受講しています。そのため様々なバックグラウンドの学生がおり、どの辺りに標準を合わせればよいか苦慮しています。科学史的な事を話してから、そのテーマの重要な点について授業をしています、アンケートでは難しいという学生も少しいます。
- ・やや表面的な状況の説明になっていたと思うが多くの参加は状況を知らないのも、有意義であったと思う。社会（人文）系では体系的な履修をすすめる必要が指摘されていたが、現状では各学生がどういう科目構成で履修しているか把握し、助言するシステムが存在しないので、早急に整備すべきと感じた。
- ・自然系分野の問題は早急に解決すべきであろう。  
英語については、意見が多岐にわたりすぎて、統一した見解を出すのは困難。センターの方で一定の指針を出し、各学部でそれを理解してもらえない。

**Q3. 第2日目の個別テーマ討論「リメディアル教育のあり方ー学部教育とリメディアルー」に関し、感想等をご自由にお書き下さい。**

- ・専門学校の進学率の高さに、今まで全く知らなかったのも、とても驚きました。専門高校の現場の先生の声の聞いたのは有意義でした。
- ・これも自由討論時間が短すぎた。（2時間ぐらいの討論があるべき）  
専門高校向けのリメディアルは推薦入学後、すぐに12月～3月の間に集中してやった方がよい（全共で責任を）。いわゆる「リメディアル教育」は既修者（普通高校も含め）の力の劣る子を対象にする方がよい。（1年後期～2年前期にかけて）→学科が責任を持つ。
- ・AO入試についての岐阜農林の先生の意見を聞きたかった。
- ・第1日目にも出た話なのですが、リメディアルを矯正なのか、補修なのか、またリメディアルなのか、初学年度教育なのかを明らかにして、進めることが重要であろうかという感想を持ちました。私自身は学部の為の一つの考えを私なりに導き出すことが必要だと痛感しました。
- ・「入試」成績による序列化によって「専門高校」の教育が歪められている。お話を伺った限りでは、「数Ⅲ」は授業にならないので行っていないという。何故「成績」の悪い生徒が専門高校に行かねばならないのか？  
専門高校の課程内容がなければ、進学者ならば普通課程でもっと時間をかけて教育すべきではないのか。  
専門の内容が大学で行われる時「数Ⅲ」がなければ意味をなさないとすると一体これは何を意味するのか？

(専門高校の意義)

- ・高大連携の機会があってもよいと思った。
- ・リメディアル教育の現状・問題点が良く理解出来た。職業高校の優秀な学生を受け入れるためにリメディアル教育のシステムを改善して欲しい。ただ極めて低い学力の学生もいると思われるので(リメディアル教育でもどうにもならないような)、やはり推薦入試は厳格に行うべきであろう。留学生に対するリメディアルも考えるべきではないか？
- ・「リメディアル」という言葉になじみがなく、この場で初めて理解した。もっと親しみやすい言葉で表現するべきではなかろうか。今日は理系科目のリメディアル教育について示されたが、理系のリメディアル教育は各学部任せればよいと思う。むしろ、英語のリメディアル教育が必要かも。一方、教養教育から考えると、リメディアル教育に多くをかける事によって教養教育の量が減ってしまう。
- ・問題点は明らかとなり、良かったと思います。用意したメニューだけで底上げは充分ではないと思います。  
学部が責任を負ってリメディアルに努めるべきだと思います。
- ・どういう内容の授業が行われていたのかの紹介があると良いと思いました。例えば高校の教科書を使っているのか。高校と違うのなら、どんな点が違うのかなど。学長、副学長は大きな宿題をおっしゃったが、それへの回答はどうなるのでしょうか。
- ・リメディアルなど不要！と思っていたが、少し考えを改めた。ここは京都大学ではない。地方大学として生き残るためにはこのような部分に力を入れるのも受験生増のためにやむなし。
- ・やはり議論がかみ合っていない。しかし、有益な情報が得られた。
- ・普通科出身も含めて、適切な開講が必要だと感じた。
- ・専門高校の1,2年生に限定するのを外せないだろうか？例えば工学部の3年次編入生は、英語・数学のレベルが非常に低い。そのような学生に現在は無条件に単位認定しているが、極めて好ましくない。そのような学生にも受けさせると効果的と思う。
- ・未履修者(専門高校以外)の為に授業を開講した方がよいと思います。「・・・の初歩」というようなシリーズで、高校レベルの内容でシラバスを作成し、入学時のガイダンスで周知されたらどうでしょうか。
- ・データに基づく具体的な報告で良かった。しかし、工業高校出身学生に限定しすぎていると感じた。本来、リメディアルは普通科からの学生も含めて、学力差の大きい状況への対応と考えるべきである。入学時点で形式的に導入するのではなく、困難を抱える学生への対応として、1～2年生を対象にした仕組みが必要と思う。
- ・若井先生の講演は、熱心さは伝わったものの、情報が多すぎて、残念ながらあまり消化出来なかった。

Q4. その他、教養教育(全学共通教育)全般に関し、要望・意見等をご自由にお書き下さい。

- ・1日目夜のシンポジウムは学長、副学長の先生のお考えを聞く会のようになってしまう、当初期待したものと少し違うかなと思いました。学期1週目をプレメントテストに使うというアイデアは出ていましたが、実際のクラス分けに使うのは難しいとしても一度全クラス(自然系、英語)で学期初めに同じテストをやってみて、どの程度バラつきがあるのか調査してみる価値はあると思います。
- ・関連する委員が全体像をきちんと把握することが、今後問題を考える上で必須と感じた。その意味で意義のあるFDだった。→連携が不可欠。

岐阜バスの朝の増便というのは、緊急課題と感じた。(全共に限らないが)  
講義内容の適切生 etc. 大学教育全般に通じる部分について、もっと大学教育委員 etc.  
でつめる必要を感じた。

- ・卒業後、企業等に職業人として対応することが出来る人材を育成する工業高校でセンターなしによる推薦入試による大学進学を希望するのか少々疑問を感じる。
- ・国が「教育体系」に責任を持って当たっていないと思われる。弱者切り捨てはここでも行われている。
- ・外国語科目 (pure science) 担当教員が減りつつある現状を知り、益々高等教育センターなどの設置の必要性を感じました。
- ・困難な面が多いとは思いますが、知恵を絞って対応してほしい。FD研究会はテーマを絞り、「アクションプラン」をたてるものにすれば良いと思う。ただ話し合うだけではどうか？
- ・FDに出席した一部の教員だけでなく、大学全体の教員が教養教育についての共通の理解が必要である。
- ・自然科学系科目を含め体系化が必要とのことでしたが、自然科学系科目を工学部の学生は1~2科目を取るような状況であり、体系化が図られても充分その意図が活かされない受講システムになっていると思います。
- ・人員をどう確保するのが問題だと思います。とりあえずは今の合意でいけるでしょうが。
- ・学生から見ると、教養教育は単位と成績のみが目標になっていて、内容的な目標がない。制度教育として教育を行う以上、教える側と教えられる側に共通の目標が必要だろう。その目標が達成されているかどうかで評価し、改善策を検討するのが筋だと思う。目的と理念だけでは実行はできない。
- ・合宿形式は疲れる。大学でやってほしい。
- ・時間割やシラバスが配布されるのは教務委員と授業担当教員のみであり、工学部の多くの教員は全学共通教育でどのような科目が開講されているのか知る機会がない。そして初めてそれを目にしたとき、「(むしろ文化センターの市民向け講座にでもふさわしいような) 非常に特論的もしくは趣味的な内容を思わせる科目の寄せ集め」「系統性が感じられず、開講すべき科目ではなくて、開講できる科目の寄せ集め」といった印象を受けたという声を多くの教員から耳にする。例えば工学部では日本人でありながら高校でまったく日本史すら学んでいないような学生が多いが、そのような学生に対して、担当教員の興味に基づく特定テーマの授業をすることが教養教育のすべきこととは思えない。私は高校の教科が、題材としては、社会人としての「教養」のミニマムに近いのではないかと思う。中村センター長曰く「今の大学生は昔で言えば高校生」という現実、またミニマムであるはずの高校の教科ですら、全教科学んだ昔と違い、大学受験に歪められて特定の教科しか学習しないという現実を考えると、大学としては淋しい話ではあるが、「高校の全教科の内容をしっかりと身に付ける」という程度を教養教育の目標に設定するのが現実的にすら思える。(もちろんこんなことは外に向かっては言えないが)。そういう意味では、昔の大学生から見ると、教養教育をすべてリメディアル的な教育に当てるということになるのかも知れない。「1を聞いて10を知る」ようなTOP2%の学生を対象とした昔に比べれば、「10を聞いて1を知る」学生の教育には100倍の時間とエネルギーがかかる。限られた時間と人員でやる以上、やはり達成目標はかなり低く設定せざるを得ないのではないかと思った。
- ・リメディアルについては、大筋で工学部新村先生のご意見に賛成。大学入試においては、入試科目も合否判定もすべて学部が責任と権限を持っている。リメディアル教育は

その学部が受け入れた学生がスムーズに学習を進めていく上での援助手段のはずであり、基本的には全学共通教育の話ではなく、学部が責任を持って実行していくべき部分であると思う。また高校での学び方で対象者を固定するのではなく、初年次開講の各部局の重要な基礎科目群の学習状況から対象とすべき学生を察知し、リアルタイムに対応すべきだと思う。代数Iと代数IIという例が出ていたが、セメスター制にこだわらず、例えばアメリカのように同じ科目を週に複数回開講して、代数Iを5週とか7週とかで終われば、後期開講の代数IIまでにケアが必要な学生に対する何らかの救済措置を施す時間も確保できるのではないかと思った。

- ・若井先生の講演でも多くの結果がGPAで整理されていたが、私は「GPAの負の側面」が気になっている。

私の所属学科では3年生には選択科目が多く開講されているが、せっかくのそれらの科目を多くの学生は選択せず、週休3日とか4日という学生がほとんどである。学生に聞くと「卒業単位に合わせて履修科目数を極力減らした方がGPAを上げるには有利」と口をそろえて言う。大学では興味本位でいろいろな分野の話聞くことも大切であり、特に教養教育はそういう側面が一層強いと思うが、GPA崇拜(+CAP制?)がそれを阻害しているように思える。数年前は、意識の高い学生、学力に余裕のある学生は卒業単位を大幅に超える単位数を取得して出て行くのをよく目にしたが、最近はそのような学生が大幅に減っているようで残念に思う。例えばGPAの算出対象を必修科目と専門基幹科目(コア科目)のみに限定するなどの措置を取るだけでも、この弊害はかなり軽減できるのではないかと思う。

広報誌、平成19年度「ディアロゴス（第1号）」を発刊いたしました。

当ディアロゴスは、平成19年9月27（木）～28日（金）に学長、佐々木副学長（教学担当理事）、センター員及び各学部教員、総勢60名の参加を得て、1泊2日で実施した「第1回岐阜大学教養教育推進センターFD研究会」の内容を取り纏めました。

当研究会のテーマである「学部の考える教養教育－基本的な考え方と具体的な課題－」について、「学部教育と教養教育」及び「リメディアル教育のあり方」での発表を中心に様々な問題点が数多く示され、参加者がそれぞれの問題点を再認識いただき、今後の教養教育の方向性、考え方への大きな刺激になったものと自負しております。

問題点は余りにも多く、多様であることから、今すぐに抜本的改革という訳にはいかないの言うまでもありませんが、少なくとも問題の所在が明確となり、参加者間での共通の認識が得られたものと思います。

教養教育推進センターでは、当FD研究会での討論を踏まえ、実施可能な部分から順次改革に着手していく所存であります。

また、当FD研究会では、20名余りの教員が夜遅くまで議論を交わされ、日頃、公務等多忙なこともあり、こうした機会はなかなか得られないことから、大変有意義で意味のあるFD研究会であったかと思えます。

「学部教育と教養教育」、「リメディアル教育のあり方」等の諸問題は根深く、引き続き審議・検討を重ねていかなければなりません。今後も、教員・学生の声をできる限り取上げ、少しでも教養教育を良い方向へと前進させていきたいと考えております。

皆様から、様々な形での御意見・御要望及びアイデアをお寄せいただけたら幸いです。

岐阜大学教養教育推進センター・副センター長  
（岐阜大学教養教育広報・FD専門委員会委員長）  
小澤克彦



## 表紙 ソクラテス

紀元前5世紀、ギリシャに生まれたソクラテスは「人が人として生きる意味」を史上初めて自覚的・意識的・方法的に問うた「哲学の祖」として知られる人です。実を言うと、本格的な「学問」というのはこのソクラテスの問いから生じていったのであり、それは「人が生きていることの意味」を問うことからさらに「人がここに生きている世界」への問いとなっていったからです。私たち人間は「この世界に生きている」からです。私たちが、何が対象であれ「疑問を持ち、追求し、学ぶ」というのも本来はそうした意味がありました。「学ぶ」ということはただ単に私たちの衣食住の欲望を満たすための手段を探すためだけではありませんでした。ところが近代以降の科学はそうした「欲望の充足のための手段」とされていく傾向が強まりました。これはこれで人間の生物的な欲求を満たすものとして意味はありますけれど、人間はそれだけで生きているわけではないはずです。私たちが生きているのにどんな意味があるのかを問うことは、「人が人らしく生きる」ために必然的なことだと言えます。「本当の学問」を取り戻したいです。



岐阜大学教養教育推進センター広報誌「ディアロゴス」第12号

### 発行

国立大学法人 岐阜大学  
岐阜大学教養教育推進センター

### 編集

岐阜大学教養教育推進センター広報・FD 専門委員会  
〒501-1193 岐阜市柳戸1番1  
TEL. 058-293-2178 FAX 058-293-3020